

第Ⅳ章 しもあそうだはただ 下筋生田畑田遺跡

第1節 調査経過

1 調査の概要

福井市下筋生田町畑田にある。

福井市下筋生田町は、上筋生田町の西にあり、国道8号線の東に隣接している東西に長い集落で畑田地区は集落の東端にある旧村社「白山宮」から水田をはさんで50mほど北側にある。

現状は水田中にある畑で通称「ウシロバタケ」と呼ばれている。

昭和56年度での調査区は、通称「ウシロバタケ」と呼ばれる畑に東に隣接した施工前の大町川の北側に隣接した地で、施工後には大町排水路になる予定地を調査した。調査区の設定は、南北に長い調査地を南から0区から3区までとした。各区は幅4.5m、長さ26.5mの中に0区が3.0m、3区が3.5mとなり、1・2区は10mとした。調査地の南北両端で基盤層となっている青灰色のシルト層を検出し、中央部では漆黒色の粘性の強い土が深く堆積していた。これらに土壌と溝が掘り込まれ、それらの遺構からは近世初頭と平安時代の遺物が出土し明らかに二つの時期の遺構を検出した。しかし遺構を検出した面に上下関係はなく、このことはすでに遺構の掘込まれた最上面が、水田にするために削平され、失われたためと理解した。

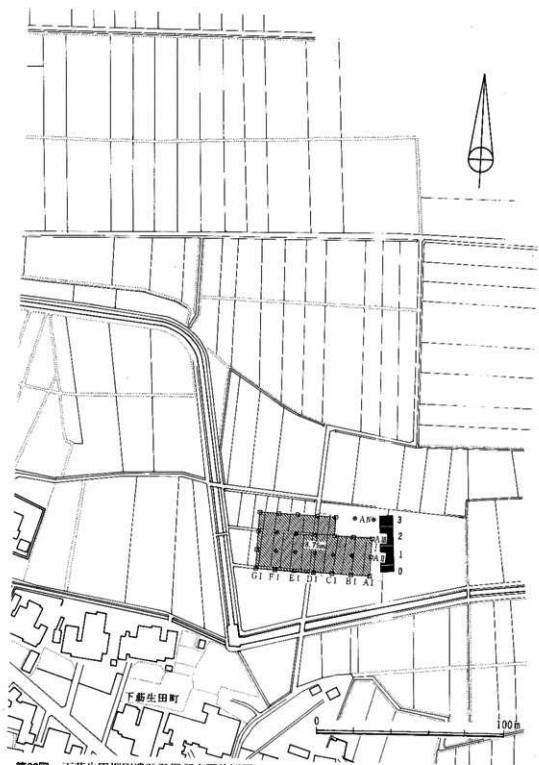
昭和57年度の調査は、前回の昭和56年度調査地の西に接した通称ウシロバタケと呼ばれる畑地である。昨年度の調査地は水路予定地であり、遺構が存在する微高地が水田になるために削平された畑地であった。

調査区の設定にあたり、10m方眼を調査予定調査地全域に設けて10×10mを1区とした。その方向は、畑地の現況の区画と合わせるようにした。調査地の南東隅の杭を基準となるA1とし、北へA2～A4、西へB1～G1とした。28ヶ所設定した調査区は、南東隅の杭を調査区の呼称にすることにした。

調査は、南東隅のA1区から開始され、南側と東側に巾1mの土層観察用ベルト兼排水運搬用通路を残して順次西と北へ向い、B1・C1・A2・B2・C2・C3区に着手した。D1とD4を結ぶラインを、遺跡を南北に切る土層観察用ベルトにし、ベルトから東側の7地区を先に実施し、西側については、7地区の終了後実施することにした。

昭和55年度に開始した泉宮緑農住区開発関連土地基盤整備事業に伴う調査は、遺跡の破壊を極力避けるよう実施してきたために、遺構まで達するような施工方法をとる用排水路についてだけ発掘調査を実施し、遺構に影響がない水田面は、調査対象からは外してきたが、畑田地区の昭和57年度調査では畑を削平して水田化するため調査のやむなきに至った。

終了後の調査区は、昭和56年度分として147.5m²、昭和57年度分としてA1・2、B1・2、C1・2・3、D1・2・3、E1・2・3、F1・2・3区の16区画の1600m²で総面積1747.5m²であった。



第26図 下筋生田畑田遺跡発掘調査区位置図

2 調査日誌抄

1981(昭和57)年

- 1月6日 本日より下筋生田町畑田での調査を開始した。調査区は水路幅で10m毎に0～3区まで設定した。
- 1月7日 遺構の掘り下げに伴い、隆平永寶が出土した。
- 1月9日 中世のものと思われる小形の石硯が出土した。
- 1月11日 遺構を完掘し、写真撮影を終了した。
- 1月12日 平面図と断面図を作成し、昭和57年度の下筋生田畑田遺跡での調査を終了した。

1982(昭和58)年

- 5月17日 本日より畑田地区における昭和58年度の調査を開始した。テントの設営と発掘器材の搬入後、調査区を設定した。
- 5月18日 福井平野での微高地の調査は、過去においての例が少なく遺構検出面の推定が困難であったために重機による表土の除去は取りやめ、南東隅のA1区から人力で開始した。
- 5月19日 B1区の表土除去作業を開始した。
- 5月20日 C1区の表土除去作業を開始した。
- 5月21日 D1・E1区の表土除去作業を開始し、上層の遺構面検出も終了して整地面を検出した。C1区の遺構面の検出作業をし、須恵器が多く出土した。
- 5月22日 F1区の表土除去作業を開始した。
- 5月24日 D2・D3区の表土除去作業を開始した。
- 5月27日 A1・B1・C1区の遺構検出をはば終了し、溝等の遺構の掘り下げを開始した。
- 5月28日 A1区の平面図を作成した。C1区北半で、小さな玉砂利敷きの整地面を検出した。その下には平安時代の落ち込みを確認した。
- 5月29日 B2・C2区の表土除去作業を開始した。
- 5月31日 C1区で検出した石敷遺構の延長を探すため、B2・C2区の表土を除去したがわずかに石敷きが検出されただけで明確ではなかった。C1・B2区の遺構の上面を掘り下げた。
- 6月1日 A2・C3区の表土除去作業を開始した。
- 6月2日 F1区の表土除去作業を開始した。
- 6月7日 B2・C1区の井戸を掘り下げた。B2・C2区でも石敷遺構を確認し、検出作業をした。
- 6月9日 E2区の表土除去作業を開始し、A1区の井戸を掘り下げた。
- 6月10日 E3区の表土除去作業を開始し、A2・B2区の土壌とB2区の井戸を掘り下げた。

- 6月11日 F2区の表土除去作業を開始し、B2区では平面図を作成した。
- 6月14日 F3区の表土除去作業を開始した。石敷遺構は、検出全面にわたり検出し、清掃後に写真撮影した。
- 6月15日 A1・B1・C1・A2・B2・C2区の写真撮影ため清掃し、終了する。
- 6月16日 A2・B2・C1区井戸を掘り下げ、B1・B2区溝の写真撮影した。
- 6月18日 A1区B1区2層掘り下げた。
- 6月19日 A1・A2・B1区2層掘り下げA1・B1区から多くの遺構が検出された。C1・C2・C3区1層直下の実測のため、水系を設定した。
- 6月21日 C1・C2・C3区の平面図を作成し、B2区井戸を写真撮影した。
- 6月22日 A2・B2区2層の掘り下げて遺構を検出した。
- 6月23日 C2区2層を掘り下げ、A1・A2・B2区の土壌も掘り下げて清掃した。
- 6月24日 B2区の平面図を作成し、C2・C3区を掘り下げた。
- 6月25日 C3区2層掘り下げ、A1・A2・B1・B2区2層遺構上面の平面図を作成した。
- 6月30日 A1・A2・B1・B2区の遺構を掘り下げた。
- 7月 1日 B1区のSE-036井戸から多量の茅と木材の炭化材が出土した。
- 7月 3日 A1・B1区2層直下の平面図を作成した。A2・B2区の遺構を掘り下げた。
- 7月 5日 A2・B2区2層直下の平面図を作成した。C1・C2区の遺構を掘り下げた。
- 7月15日 E・F区の土層観察用の土手を外し、A1・A2・B1・B2・C1・C2・C3区2層で新たに検出された遺構の平面図を追加実測した。
- 7月16日 A～C区の平面図作成を終了し、撮影のため清掃した。
- 7月17日 D・E・F区1・2層A・B・C区3層を掘り下げて遺構を検出し、A・B・C区の遺構を掘り下げた。A～C区を撮影のために清掃した。
- 7月19日 D1区を中心としてD2・E1・E2区の遺構を掘り下げた。
- 7月27日 B1・B2区3層を掘り下げた。
- 7月28日 D1・D2区3層を掘り下げた。
- 7月29日 D3区3層を掘り下げた。
- 8月 3日 E1・E2区3層を掘り下げた。
- 8月 5日 E1・E2区で検出した大きな落ち込みを精査した。
- 8月 6日 B1・B2・C1・C2・C3・C4区の清掃した。D1・D2・E1・E2区を写真撮影した。
- 8月 9日 B1・B2・C1・C2・C3区3層の平面図を作成した。D1・D2・D3・E1・E2区に実測のための水系を設定した。
- 8月12日 標準的なC1区のSE-501井戸を断割り、写真撮影と土層図を作成した。
- 8月13日 下筋生田畑田遺跡の調査を終了し、撤退した。(山口)

第2節 遺構

1 遺跡概説

下蒔生田畑川遺跡は、福井市下蒔生田町字畑田にある。

調査着手前の遺跡の現況は、約2400m²の畑であった。福井県福井耕地地務所作成の縮尺1/1000の現況図によると、畑が海拔8.48～8.36m、周囲の水田が海拔8.40～8.14mであった。しかし、現状は水田と畑の比高差が大きく0.2～0.6mほどあった。昭和56年度で調査した部分は、畑を削平して水田にしたところで、地元の古老の話によれば戦前はより広範な畑であったという。

現在集落が立地している自然堤防とは明治年間の小全図でも接続しておらず、独立した微高地になっている。そのため人為的に切り離されたとは考えられない。

遺構の検出面までの層位は、最上層が畑の耕作土で粘性の強い茶褐色土であった。層厚は、耕作物の影響により極地的な変化はあったが、下層の境界にあたる面は一定しており、0.14～0.38mであった。

耕作土から掘込まれた落ち込みは、現代のもので、ビニール等が出土し家庭の生ゴミを肥料として埋められたもの痕であった。

耕作土の下には暗茶灰色を呈した土があり、カーボン粒子や砂等がわずかに偏在して混じっていた。この土層の上面からは、多数の落込みを確認したが、耕作土から掘込まれた穴が耕作により上半を欠き、耕作土の下にまで達していた穴の下半がほとんどであり、まれにⅡ層もしくはⅢ層直上から掘込まれた遺構の痕跡があった。

Ⅱ層の上面から精査していく過程で順次遺構を検出した。

D1とD4を結ぶ幅1.0mの土層観察用ベルトから西側は、ベルトに沿って着手し、東側と同様にD1・D2・D3・E1・E2・E3・F1・F2・F3区を第Ⅰ層から除去した。層序は東側と同様のⅠ層、Ⅱ層が堆積していた。Ⅲ層においては砂を含む土層として基本的に一致していたが色調、粘性、硬さにおいて変化があり同一層とは考えられなかった。又西へよるほど、砂の混じるⅢ層はなくなり、それにかかわってⅡ層直下には、褐色を呈した粘性の強い土層があった。

なお501号井戸の断面を写真撮影するために地表から約3m下まで広く掘り下げた結果、旧河道を検出した。旧河道は、上蒔生田遺跡の第Ⅰ次調査・上蒔生田遺跡江勢地区・上蒔生田遺跡八ヶ坪塚町地区で確認されてきた旧河道の延長上にあり、幅10～20mであろうと推定される。深さは3m以上であった。

調査された部分は、なだらかに落ち込む河岸の肩にあたり河底では中期弥生式土器が出土している。3層にも見られた砂を含む層は旧河道の位置とほぼ同じ範囲に広がり、旧河道が埋没した後も流路として残ったものと思われる。

A1区・A2区は、今回設けた調査区の一番東側にあたり、昭和56年度調査区の西側にある。遺構は井戸12基・柱穴13・不明遺構43を検出した。

2層中に遺構面があった。2層は、暗茶灰色を呈したややしまった土層で、1層を通過した水分が一時停滞するため、金属分（鉄分）が残っている。2層中で遺構は検出されているが、層中の一面で検出したのではなく、各々が同一の層中にありながら上下関係にある。そのため同一面で検出して、遺構相互の関係を把握することはむずかしい。

36号井戸からは約1mまでに多量の茅と径0.05m内外の木材が炭化して出土し、火事で焼けおちたものと思われたが、井戸底までは達しておらず、半分ほど埋没させた後に、投棄して燃しており、縄、握り飯等も混じっていた。

A2区からは直径0.15m内外の丸太を柱根としてのこす柱穴が44・45・46・55・58号柱穴（第33図 44・46・55・58）にあり、その他にも笏谷石（緑色凝灰岩）製品やその破片を礎石として柱穴の底にすえたものもある。A2区を中心になんらかの建物があつたものとおもわれる。

性格不明遺構の中で33号等のように径1mをこえるようなものには、焼土塊が多量に出土するものがある。

B1・B2区で検出した遺構はA1・A2区と同じ2層中からである。遺構は井戸15基、柱穴30、溝7条、不明遺構57と、C1区で明確に検出した石敷路の石敷部分が一部のびている134号井戸（第33図 134）の平面形が井戸本体と崩壊による変形がはっきりと見られる。このように片側だけが崩壊した例は少なく、ほとんどは周囲すべて崩壊していた。又近接する168・169号井戸（第33図 168・169）のように互いに引合い崩壊するようである。

B1区には柱根をのこす93・101・113・115号柱穴（第33図 93・101・113・115）とその他の柱穴が集中する。又B2区北半分にも多い。この2箇所には建物が存在している。

A・D・E・F・G・H・I溝（第33図 A・D・E・F・G・H・I）がある。これらは排水路と考えられるが溝底の高低はほとんどない。I溝（第33図 I）は石敷路の片側に沿わせて掘らせた溝であり、道路に付属する排水路と思われる。この溝がB2区の半ばで消えており道路もそこで終わっているのであろう。A溝（第33図 A）もC2区から連続しているものであった。

石敷路は170号井戸（第33図 170）の上面を覆ってのび、図示されない延長上にもわずかに散乱する円礫が検出されたが、面として広がるものではなかった。

C1・C2・C3区で検出した遺構は2層中からである。遺構は井戸8基、柱穴20、溝7条、石敷路1、不明遺構48であった。

井戸はC1・C2区にだけあり186・188号井戸（第33図 186・188）を除けば、大きな崩壊をまねがれてほぼ旧状を保っていたと思われる。特に194号井戸（第33図 194）は崩壊がなかったと思われる。又186号井戸（第33図 186）は大きく三段に崩壊していた。これは井戸を使用しなくなってすぐに埋めたものと、埋めずに自然崩壊する期間があつたものの違いであろう。

C2区に柱穴が集中しており、柱根をのこすものは226号柱穴（第33図 226）のみではあるが建物の存在がうかがえる。

198号柱穴（第33図 198）は、壁の崩落がほとんどないしっかり方形で底からは地鎮具として使

用された六器・袋(小把)・絆が出土している。

A・B・C・I・G・K・L溝(第33図 A・B・C・I・G・K・L)の中でA・I(第33図 A・I)溝はC2区にのびていた溝の延長である。K溝(第33図 K)は2層をほぼ除去しての検出であり、最下面の遺構と言える。他の溝とは幅が広く、底面も広く平坦であった。C1区の北端で直角に納めており、排水のためとは考えられない。

石敷路(第33図)は2層最上面で検出された。下にいくつかの遺構と重なっている。通路は南端を水田に切れC1区で北にむかい途中からY字状に北東と北西にわかれている。北西にのびるものはC1区内で石敷がなくなっているが、沿わせて掘られたI溝(第33図 I)はC3区から先に北にのびている。

D1・D2・D3区から検出された遺構は、井戸15基、柱穴69、不明遺構92であった。これらはすべて2層中からの検出である。

井戸は柱穴と同様の分布を示した。D1区の267号井戸(第33図 267)は発掘時に悪臭になやまされ、便所ではないかと考えられた。近年一乗谷朝倉氏遺跡で確認された便所を発掘時には悪臭になやまされていると聞く。

柱穴はD1区に集中し、柱根をのこす286・287・289・313号柱穴(第33図 286・287・289・313)がある。この他にも重複する方形の柱穴が17ヶ所にあり、建替えがかなりあったものと思われる。

E1・E2・E3区から検出した遺構は、井戸4基、柱穴13、不明遺構59であった。

462号井戸(第33図 462)は正方形の平面形を下端までもつ唯一の例である。E1区の東半にある柱根をもつ柱穴は、D1区と関連をもつものと思われる。

E1・E2区にまたがっている大型の長方形の落込みは深さ0.1～0.15mほどで北辺で消えている。これがどのような性格をもつものかは確定されない。D・E区には9～10世紀にかけての須恵器と瓦が出土しており、それらとの関連を考慮する必要がある。又D1・E1区に柱穴についても同様である。F1・F2・F3区についても1層の除去後に遺構の検出を試みたが遺構はなく、遺跡の西限を確認した。

E・F区のある遺跡の西側では中世から江戸にかけての遺物が極端に減少し、代わって律令期の遺物が多くなっていた。56年度に調査した結果と合わせてみると、遺跡は中高の微高地に律令期の集落が営まれ、中世から江戸にかけて中央の高い部分を削平、整地してなんらかの生活があったと思われる。それは、律令期の遺構と遺物が遺跡の縁辺にだけにしか検出されたことから明らかであろう。

今回の調査では、井戸54基・柱穴172・石敷路2・溝状遺構13条・不明遺構を検出した。

これらの遺構相互の関係の把握は困難であったが、中世の末期から江戸時代の初期にかけて石敷の道路に沿って建物が立ち並んでおり、各建物には井戸が付設されていた事が想定される。ここにおける建物は、一般的な農業村落を構成する農家としては、井戸が一時的な使用にしか耐えられず、恒常的な農家とは考えられない。

(山口)

2 遺構各説

1 井戸 (第33図)

今回の調査では54基の井戸が検出された。ここで井戸とした遺構は、掘り込まれた状態が筒状で深さが2m弱のものを主に抽出した。筒状の掘り方は井戸底までに段を持つものと、持たないものがある。

すべての井戸に共通することは、素掘りであり、崩壊を防ぐなんらの施設も検出しえなかったことである。井戸底まで掘り上げた後一日もたずして崩壊が始まり、周囲には近よれる状態ではなかった。井戸底の湧水面付近の井戸枠もなく、湧水に伴ない当然崩壊するのである。

これらの井戸の周囲で井戸屋形の痕跡を精査したがやはり検出されなかった。

井戸の規模は上端で最大が径2.36×2.32m、最小が径0.57×0.56mであった。上端の規模にばらつきが目立つが、下端では最大が1.88×1.32m、最小が0.38×0.37mで径0.4～0.7mに66%が集中していた。これは上端においては崩壊の影響で正確

な旧状を把握し

えないが、下端

においては底部

であるため崩壊

はほとんどなか

ったことにより

旧状に近い数値

を計測しえたた

めであろう。崩

落を考慮するな

らば上端は1m

を超えることが

なかったと考え

るべきものが大

半を占めるので

あろう。

井戸の底は使

用目的を果すに

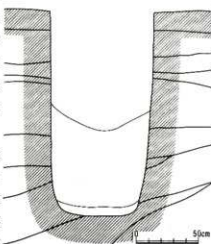
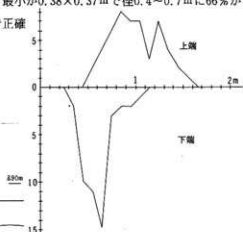
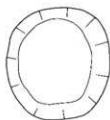
は湧水層まで達

することが必要

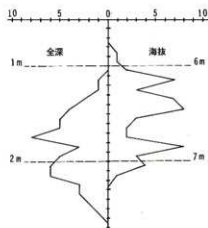
であり、それが

海拔7m以下で

あって、湧水層



第28図 下筋生田畑田遺跡
井戸上・下端径計測グラフ



第29図 下筋生田畑田遺跡
井戸底深さ・海拔計測グラフ

を探り当ててそれ以上掘らなかつたと思われる。

501号井戸は本遺跡においても最も平均的な規模をもつもので崩落も少なく、埋没状況も故意に埋められたものの好例であろう。この例では、最下層で砂層に達していないが、これは旧河道の埋没上の中に井戸を掘ったために水を汲み上げることは出来なかつたであろう。そのことから井戸を掘り、すぐに埋められたと見るのが妥当であろう。

個々の井戸については計測表に記したが掘り方に段のないものは上段下端に井戸底の規模を記し、有るものは下段下端に記した。海拔□mと記したものは、井戸底の高さを計測値を記した。また、遺構が重複していて計測不能の場合には記していない。

第5表 遺構計測表 井戸

遺構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段の 深さcm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体の 深さcm	海 抜 m
SE-011	149×173	122×106				171.2	666.4
-022	110×152?					220.5	609.3
-029	113×132	69×69				209.5	610.6
-032	87×82	71×68				175.8	640.8
-034	195×195	93×93				152.8	662.8
-036	125×165					219.2	603.4
-037	114×125	86×89				206.3	609.3
-040	129×138	56×61				176.8	614.8
-041	102×113	68×64				200.1	611.5
-042	79×89	62×58				128.0	683.6
-059	72×81	42×43				113.2	714.6
-063	80×75	36×41				254.0	591.6
-072	134×127	100×96			48×46	209.0	614.6
-111	92×87	58×68				157.4	677.2
-131	151×160					237.0	593.6
-134	212×93	100×190	119.3		138×107	222.0	612.6
-138	138×123					246.0	581.6
-139	236×232	166×142	35.1		60×76	175.7	651.6
-140	250×200	189×198			70×70	223.0	610.6
-142	207×213	146×121					
-144	135+α×117	63×61				232.0	595.2
-146	149+α×108	91×60				174.5	659.1
-151	132×252	70×82	90.6		53×51	223.6	612.9

造 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上段の 深さcm	下段上端 cm	下 段 下 端 cm	全体の 深さcm	海 抜 m
-153	105× 99	91× 61				238.2	592.4
-163	78× 78	58× 58				213.0	642.6
-168	67× 71	48× 48				209.0	654.6
-169	57× 56	38× 37				200.0	645.6
-170	135×127	95× 87				212.0	618.6
-177	135×144	76× 98				219.0	612.1
-184	102×115	72× 70				186.0	657.1
-186	149×202	124×110			70× 68	220.3	639.8
-188	214×132	188×132				147.3	699.3
-194	80× 82	45× 42				183.0	627.1
-199	86× 69					199.5	638.6
-250	70× 68	57× 49				142.0	684.1
-267	74× 74					195.5	660.6
-295	72×90+ α	52× 61				153.5	685.1
-296	105×106	49× 62				164.0	695.1
-318	92× 88	67× 61				203.0	653.1
-329	78× 88	53× 56				195.0	657.1
-361	95× 95	77× 77				199.0	652.1
-369	88× 86	67× 61				155.0	679.1
-380	104× 90	74× 64				183.0	666.1
-386	122×136	80× 81	70		46× 56	145.5	700.6
-397	104× 92	69× 73				178.0	667.1
-400	72× 62	45× 45				178.0	666.1
-417	86× 92	67× 77				145.0	684.1
-418	60× 54	56× 64				155.0	687.1
-421	80× 90	68× 72				166.0	671.1
-439	94×131	92×124	40		50× 54	166.0	685.1
-456	122×104	73× 72				201.0	652.1
-459	112×108	67× 45				171.0	664.1
-462	94× 92	59× 61				168.0	686.1
-500	94×75+ α						
-501	43+ α × 70	23+ α × 53				165.0	659.6

2 柱穴（第33図）

今回の調査からは、172の柱穴を検出した。

柱穴は建物の一部を構成するものであり、建物の考古学的な資料としては建物を復元する上で最も重要なものである。本遺跡から検出した柱穴は、平面的な相互の関係が一棟の建物として把握することが出来なかった。

本遺跡から検出された柱穴には構造的に3タイプがある。

これで柱根を残している明らかに柱が立っていた柱穴から取上げてみると、46・143号柱穴でみられる礎石を柱穴の底に据え、その上に柱をのせているものが一つである。このタイプの礎石に使用された石材は、笏谷石（緑色凝炭岩）製の石臼等の石製品の廃物を利用し、礎石として当初から製作されてはいなかった。その他の自然石を利用する例も無かった。

44・45・58・101号柱穴等でみられる柱穴は、掘り方とその底部にもう一段柱よりやや大きめの掘り方を設けてそこに柱をすえるいわゆる二段式のタイプである。

最後のタイプは286・287・289号柱穴でみられる柱穴の掘り方を一段だけにして底に柱をすえるものである。

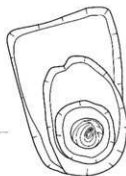
後二者のタイプは柱をすえる礎石をもたないことでは近い関係にあると言えるし、313号柱穴にみられるように一段掘りのタイプにすえられた柱が沈み込んだ場合には、二段掘りのタイプと判別することがむずかしい場合もありうる。

この3タイプとは別に平面的プランによっても三分できる。それは正方形もしくは矩形の44・45・442号柱穴等のもの、円形の58・101号柱穴等のもの、不定形の286号柱穴等のものである。

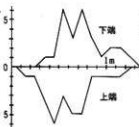
矩形・円形は、最初から意図した平面形をそのまま遺した例で、不定形は、柱の抜き取る際に掘りかたを破壊したか、自然に崩壊したのであろう。

一棟の建物のために掘られた柱穴が同一のタイプであれば、一棟の建物の把握は容易であろうが、そのような例はなかつたために建物の把握を困難にした。

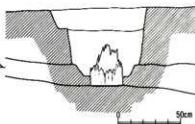
矩形をした198号柱穴ではこのタイプの一つの例として地鎮に使用された宝器を埋納していた。これは矩形の掘りかたをもつ柱穴が他のタイプの柱穴よりも重要な意味を持っていたことを示した例であろう。



920m



第30図 下筋生山畑田遺跡
柱穴上下端計測グラフ



第31図 198号柱穴実測図

172の柱穴を抽出したがこのほとんどには柱根、礎石等の明らかに柱穴であることが判断できるものは少なく、礎石、柱根等を残す柱穴は40であった。この40の柱穴は、正方形もしくは矩形のもの、円形のもの、不定形ものが67.5%、10%、17.5%となり、約7割近くが方形であった。又方形の平面的規模をみると長辺が50~90cmに66.7%が集中している。又二段掘りにして柱をすえる穴を設けているもので平面的規模が上記のものに近いものも抽出した。

これらの柱穴はA2・B1・C1・C2区を中心に五群に集中している。五群のそれぞれに建物が存在しているのであろうが、柱穴相互を関係づけることがむずかしいが柱穴が重複しているものが多く建替えが行なわれたことがうかがえる。又建替えには従来の柱を引抜いたと思われる115号柱穴等の例もある。これが材の再利用のためにしたかどうかは不明である。

第6表 遺構計測表 柱穴

遺構 番号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m	備考
SK-001	70×67	47×43	38.6	29×26	18×19	67.3	772.3	
-002	79×56	64×46	33.0	26×25	18×17	53.5	783.1	
-030	59×72	49×55				8.9	831.6	
-031	78?×60	72?×47				21.5	799.0	
-044	62×59	45×47			24×21			柱根
-045	76×106	50×81		50×76	12×13	33.0	812.6	柱根
-046	60×62	47×42				11.2	803.4	柱根、石臼
-047	50×78	37×58	10.6		13×18	17.7	812.9	
-050	74×64	62×52	27.5		12×12	36.2	785.9	
-055	56×60			31×12	14×14	20.1	798.3	柱根2
				14×28	12×12			
-056	50+α×50	14+α×20				5.7	802.1	柱根
-058	59×58	44×44	23.6	27×27	16×16	36.4	785.9	柱根
-068	77×62	62×44			37×14	32.0	794.9	石
					22×20			
					13×14			
-071	59×49	18×18				29.0	505.5	
-073	147×36	39×34				53.0	721.1	
-074	74×84	62×64				34.8	784.3	石臼
-075	52×56?	32×32				27.0	822.5	
-076	64×68?	48×38+α				16.5	802.6	
-080	64×64	41×42				52.0	768.1	

遺構 番号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m	備考
-081	56×61?	48×42+α				14.7	805.9	
-084	61×53	42×40			25×22	41.0	793.6	
-089	92×88+α	78×55+α				40.0	808.6	
-090	68×86	60×74				78.0	770.6	
-091	108?×57	97?×49	34.8			53.0	765.6	
-092	109×92	89×84	23.0	39×33	28×24	50.0	784.6	
				22×30	26×23	56.0		
-093	75×54	58×38			26×26	31.0	784.6	柱根
-094	62×58	39×34	18.0			34.0	802.6	
-097	104×68	88×52		40×34	29×28	48.3	750.6	
-101	74×69	28×26				12.2	807.4	柱根
-103	85×46					9.2	809.4	
-106	76×48	56×39				29.5	820.6	
-107	52×50	27×28				69.4	747.2	
-108	36×28					37.0	810.6	
-112	26×22	18×14				28.0	836.0	
-113	118×96	59×46	10.9			52.0	782.6	柱根
-115	84×118	72×80				32.5	802.1	柱根
		42×37			48×42			
-130	37×36	30×31			11×12	16.0	830.0	
-143	101×60	80×46				45.0	782.1	柱根、石臼
-145	75×100	58×80				42.0	807.7	石臼
-150	107×110	88×84				11.0	834.6	
-159	62×51	28×28						柱根
-160	97×100					12.0		
-173	62×71?	50×60?				28.8	807.8	
-175	56×63	38×41				31.8	799.3	
-178	68×45	52×28	31.0		27×24	36.0	798.1	
-185	103×78+α	82×80+α				59.8	785.6	石
-193	90×72	73×63				16.2	821.6	
-197	74×40	67×28			39×24	18.8	805.0	
					26×24			

遺構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m	備考
-198	60× 64	53×54+α				84.9	746.5	
-200	70× 92	59× 77				28.4	808.3	
-201	100× 60	82× 48				22.3	814.4	
-202	60× 38	47× 31				41.7	795.0	
-206	107× 83	92× 64				24.3	810.1	
-207	108×108	50× 43	15.8		24×18	36.9	797.5	
-208	104× 84	51× 57	12.6		35×40	37.9	797.2	
-219	110× 68	70× 38				57.0	750.1	
-220	45× 68	40× 46				72.7	766.6	
-221	55× 68	39× 50				86.7	747.6	
-222	58× 78	44× 60	19.5			91.1	741.7	
-223	62× 68	50× 58				71.1	763.7	
-224	108× 63	68× 98	17.0		10×11	30.0	787.1	
-226	27× 28	14× 19				28.0	765.1	柱根
-228	62× 45	46× 30				14.0	809.8	
-261	54× 65	11+α×47				20.0	804.1	
-262	58× 70	48× 61				17.0	794.1	石臼
-269	62× 58	54× 44	5.0	43×39	36×30	44.0	793.1	
-271	68× 49	33× 32	17.0			62.0	775.1	
-272	75× 71	67× 64				44.0	792.1	
-275						12.0	825.1	石
-276	48× ?	38× ?		23×28	13×15	14.0	822.1	
-277	28× 33	23× 18				50.0	786.1	
-278	54?× 43	43?× 21				25.0	806.1	
-279	61× 51	49× 38				15.0	815.1	
-280	67× 44	50× 33	15.0	12×12	7× 7	19.0	810.1	
-281	89× 48	74× 47		24×24	14×14			
-282	62× 51	58× 43	6.0	31×21	21×11	41.0	793.1	
-283	61× 54	45× 42				19.0	815.1	
-284	67× 77?	49× 70?				19.0	819.1	石臼
-285	98× 55?	75× 32				69.0	796.1	石
-286	70× 55	62× 47	?	22×22	20×20	62.0	792.1	柱根

遺構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m	備考
-287	73× 62	60× 52		24×20	20×18	56.0	798.1	柱根
-288	38× 37	28× 25				19.0	825.1	
-289	317 ? × 79	290 ? × 60	?	26×26	24×20	47.0	812.1	柱根
-290	70 ? × 69	60 ? × 59				22.0	817.1	
-291	86× 74	68× 69				38.0	804.1	石
-298	60× 52	52× 43	?	32×52	28×48	65.0	793.1	
-299	74× 86	51× 67				50.5	781.1	
-301	× 32	13× 21				22.0	816.1	石
-302	97× 78	85× 62				16.0	819.1	
-303	29× 30	20× 21				23.0	812.1	
-304	96×114	79×102				39.0	818.1	
-307	37× 61	29× 52				62.0	796.1	
-308	× 54	× 46				43.0	815.1	
-309	× 34	× 21				50.0	807.1	
-311	69×	59×	25.0	37×40	21×27	40.0	798.1	
-313	126× 86	111× 75	40.0	53×50	41×36	52.0	786.1	柱根
-314	89× 69	78× 56	14.0	41×28	34×16			
-315	× 49	17× 26				47.5	808.1	
-316	× 45	× 30				77.0	780.6	
-319	97×	79×	57.5	43×	25×	82.5	786.1	
-320	32× 27	21× 21				67.0	777.1	
-322	51× 42	35× 25	29.0	14×10	17× 9	39.0	813.1	
-323	68× 91	62× 91				13.0	838.1	
-325	39× 61	32× 51				34.0	822.1	
-326	74× 55	50× 37				48.0	789.1	
-327	× 54	× 42				36.0	799.1	
-330	90×214	80×204				42.0	791.1	石
-332	31× 23	27× 19				34.0	819.1	
-333	37× 25	25× 18				11.0	815.1	
-334	31× 42	18× 31				39.0	815.1	
-335	44× 28	32× 18	11.0	20×14	9× 9	18.0	836.1	
-336	32× 36	24× 26				22.5	832.6	

遺 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全 体 深cm	海 拔 m	備 考
-337	42× 38	30× 29				37.0	818.1	
-338	36× 49					7.5		
-339	51× 56	33× 24	25.0	35×30	24×24	43.0	811.1	
-340	18+ α ×40	12+ α ×28				18.0	832.1	
-342	52× 49	42× 40	18.5	24×26	14×14	28.5	826.6	
-343	40× 42	32× 34		26×25		23.0	831.1	
-344	67× 72	60× 53				45.0	792.1	
-345	78× 62	67× 51				37.0	800.1	石臼
-346	50× 78	28× 68				17.0	815.1	
-347	61× 39					44.0	789.1	
-348	86×126	62×124				38.0	792.1	
-349	62× 64	49× 59	18.0	30×33	25×22	40.0	794.1	
-353	52× 57	43× 42				25.0	810.1	石
-356	40× 65	30× 42	13.0		24×22	16.0	813.1	
-357	31× 35					32.0	819.1	
-358	51× 54	32× 40	32.0	24×24	12×11	48.0	801.1	
-359	52× 83	70× 77				41.0	800.1	石
-360	61× 51	49× 42				38.0	799.1	石
-362	44× 44	34× 37				7.0	818.1	
-366	77× 77	50× 37				96.0	736.1	
-370	54× 44	41× 38				31.0	759.1	
-371						37.0	790.1	
-372						39.5	791.1	
-375	60× 48	43× 34	26.0	33×32	26×21	47.0	802.1	
-377	68× 61	57× 49				15.0	814.1	
-381	48×42+ α	37×37+ α	21.0	28×27	15×22	35.0	811.1	
-382	41× 71	24× 24				51.0	778.1	
		22× 20						
		30× 48						
-383	38× 40	28× 29				58.0	785.1	
-384	41× 65	37× 55				35.0	810.1	
-387	50× 54	40× 40				64.0	782.1	

遺構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m	備考
-388	48× 51	15+ α ×43				26.0	818.1	
-394	38× 54	28× 42	34.0	28×25	21×24	59.0	788.1	
-395	38× 50	32× 46	36.0	31×32	24×22	52.0	795.1	
-399	64× 40	40× 30	13.0	18×21	20×16	43.0	801.1	
-402	64× 59	37×38+ α				47.0	796.1	
-404	26× 26	18× 16				13.0	831.1	
-406	54× 50	32× 48	56.0		20×20	66.0	775.1	
-407	47× 46	35× 28				23.0	821.1	
-409	62× 67	50× 56	14.0	48×60	42×35	31.0	797.1	石
-410	48× 36	34× 30	12.0	27×27	18×18	54.0	789.1	
-411	58× 72	42× 30	15.0	32×26	28×31	21.0	807.1	石白
		45× 27						
-412	47× 52	32× 44				19.0	825.1	
-420	100× 89	72× 72				78.0	761.1	
-431	53×57+ α	42×50+ α				4.0	830.1	
-432	34× 24	11× 11				24.0	797.1	柱根
-433	38×72+ α	27×72+ α	12.0		22×22	28.0	810.1	
-436	45× 61	21× 25				21.0	816.1	
		12× 13						
-442	54× 45	45× 35				29.0	800.1	柱根
-446	55× 41	42× 31				32.0	800.1	石
-448	75×	57×	19.0	32×25	18×18	44.0	793.1	
-449	× 32	× 25				15.0	814.1	石
-451	37× 41	? × 15				32.0	804.1	石
-461	57× 57	46× 48				15.0	839.1	
-467	28× 29	20× 22				31.0	821.1	
-468	39× 68	22× 57	31.0	13×30	9×17	39.0	811.1	
-469	32× 39 ?	26× 29 ?	15.0	11×11	4× 5	20.0	831.1	
-471	55× 78	27× 65				31.0	803.1	
-472	88× 47	80× 45	17.0	45×31	27×16	41.0	794.1	362と共用
-480	60× 55	55× 55	33.0	49×44	40×22	51.5	796.6	
-485	42× 49	30× 38				43.0	789.1	石

3 石敷路 (第33図)

C1区を中心にC2・C3区で南北に延びる石敷路とそれからC1区で東に分かれてB1・B2区に延びる石敷路を検出した。

調査区内では石敷部分が南北に7.50m、東西に8.68m検出された。

石敷部分の幅は、南北方向の石敷部分が広く、1.38mで東西方向の石敷部分が0.83mであった。両方が交差していた部分は当然広くなっていた。

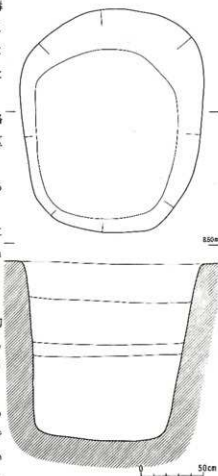
路床は、厚さ0.1mほどで砂利と土で固くしまっており、路面には小さな砂利が敷き詰められていた。石敷の最下層には拳大の円礫が一面に敷かれ、路床をより堅固にしていた。路面は多いところでは三面が確認されており、路床の改修が数回にわたって行われていた。この路床には陶磁器の破片がかなり含まれており、周囲の遺構と同時期に併存していたのであろう。

この石敷路の片側には側溝が付設されており、この溝に路床の砂利が落ちていたことから同時期にこの溝があったことを明らかにしていた。この溝からも僅かではあるが陶磁器の破片が出土していた。この溝は既に路床の石敷部分が欠失してしまったC2・C3・B2区においても延びており、石敷路が延びていたことを推定し得た。

この側溝は、石敷路が交差していたC1区から石敷路の北側に沿って北と東に延びB1・B2・C2・C3区でも検出した。調査区内では長さ24.35mを検出したが更に北に延び、調査区外の水田にまで延びていたのであろう。上端の幅は、最大0.85m・最小0.30mで平均0.4mほどであった。上端からの深さは、0.2mで東南東にのびる一方は、B1・B2区にのびて東から西に0.05m下降しており、他方は、C2・C3区に0.4m下降し、ほぼ北にのびている。

この石敷路は2層最上面にあり、他の遺構との平面的関係については明らかになっていないが、柱穴が集中していた群が石敷路をさけるようにあり、路の左右にふり分けられたように存在している。

この石敷路は、現在も存続している下蒔生田集落から北にむかって調査地に連続するようにあり、遺跡中央で左右にわかれている。現在ではこの間に水田を挟んでいる。現在の地割や明治年間の小全図の地割と異なり、それ以前に消滅していたもので、重複する他の遺構よりは



第32図 3号土坑実測図

すべて新しいものである。しかし現在のように耕地として利用する場合には石敷であることは極力避けられるべきで砂利を持ち込むことは考えられず、石敷遺構が耕地となる以前、本遺跡が営まれた時期に存在したと思われる。

他に11条の溝が検出されている。

これらの溝からは遺物が出土しておらず、その性格を明らかにすることは出来なかった。A・C溝が東西方向に延びてただけで他のB・D・E・F・G・H・J・K・L溝は、南北方向に延びていた。K溝を除いては幅も深さもほぼ同様の規模を持っており、似た性格を持っていたのかも知れない。

不明遺構として取り扱ったものが273ある。例として3号上墳を図示したが、性格・用途共に把握できない遺構を不明遺構とした。これらの中には井戸と同様の規模をもっていたが深さが極端に浅いもの等もあり、掘りかけて中止したものも含まれているのであろう。江戸時代初期ということを考慮に入れるならば貯蔵用の掘り込みが多数あることは不自然であろう。

第7表 遺構計測表 不明遺構

遺 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全体 深cm	海 抜 m
SK-003	175×150	134×117				116.2	730.4
-004	217×190	193×166	44.0	215×128	185×107	61.0	804.6
-005	37× 33	27× 20					
-006	31× 26	163× 13				21.0	826.6
-007	34× 30	19× 19				15.0	832.6
-008	112× 99	95× 87		90× 69	73× 62	63.0	781.6
-009	? × 76	56 ? × 65				36.0	808.6
-010	114×118	85× 92				93.0	754.6
-012	96 ? ×101	78× 84				118.0	727.6
-013	87 ? × 90	66 ? × 70				34.9	809.6
-014	59× 73 ?	46× 59 ?				38.0	801.6
-015	135×115	139×104				80.0	766.6
-016	129× 58	98× 47				41.2	798.4
-017	36× 32					33.7	799.9
-018	111 ? ×138	99 ? ×129				21.4	831.2
-019	164×182	116×145				73.9	755.9
-020	102×116 ?	91×106 ?				30.5	799.3
-021	27× 34	18× 32				9.2	820.9
-023	65× 58	52× 46				28.4	802.7

造 構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m
-024	$71 + a \times 98 + a$	$47 + a \times 84 + a$				38.1	794.2
-025	55×118	39× 90				68.8	763.6
-026	79×106					13.9	831.5
-027	$118 \times 62 + a$	$104 \times 62 + a$				30.8	784.8
-028	120 ? ×145					42.9	788.6
-033	$243 \times 197 + a$	$199 \times 168 + a$				25.0	820.6
-035	80 ? × 71	66 ? × 57				20.0	825.6
-038	70× 62	66× 62				64.0	781.6
-039	92× 85	64× 63				51.0	794.6
-043	52× 46						
-048	22× 24	12× 12				21.5	809.3
-049	40× 48	28× 32				44.0	777.6
-051	48× 40	38× 26				48.3	779.0
-052	11× 15					21.6	807.5
-053	62× 66					32.8	766.3
-054	$105 \times 70 + a$	$86 \times 60 + a$				24.0	820.6
-057	$46 + a \times 96$	$39 + a \times 72 + a$				49.4	773.6
-060	10× 11					24.4	802.5
-061	37× 59	29× 49				24.8	802.1
-062	42× 28	31× 24				19.3	805.6
-064	22× 23	15× 16				28.7	798.4
-065	30× 39	19× 18				22.0	805.1
-066	40× 69					34.7	792.4
-067	69× 48	45× 18		22× 20		25.1	801.8
-069	28× 31					8.0	826.4
-070	$120 + a \times 110$					48.0	786.8
-077	72× 82	60× 60				47.0	803.6
-078	60 ? ×124	? × 85				31.0	820.6
-079	113 ? ×133	? ×122				13.0	838.6
-082	102 ? × 79	90 ? × 85				46.9	787.6
-083	$42 + a \times 51$	$22 + a \times 22$				20.6	813.9
-085	42× 40	35× 27				33.0	801.6

造 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全 体 深cm	海 拔 m
-086	51× 72					33.0	801.6
-087	28× 30	16× 17				33.0	803.6
-088	36+ α × 59					49.0	784.6
-095	18× 14					22.0	812.6
-096	10× 16					37.0	797.6
-098	116? × 46	92+ α × 30				27.0	807.6
-099	40× 38	30× 26				30.0	814.6
-100	50× 44	25× 25				31.0	803.9
-102	65× 54	38× 26				69.0	780.6
-104	68× 51	49× 42				52.0	798.6
-105	54× 44	26× 24				42.0	776.6
-109	36+ α × 22	36× 22				25.6	822.0
-110	30× 29	21× 23				8.0	840.6
-114	96× 89					99.0	735.4
-116	58× 59	44× 46				44.0	804.0
-117	82× 76	36× 30				56.0	778.8
-118	133× 58	104× 34?				27.0	807.6
-119	34× 25					20.0	814.6
-120	56× 48	38× 38		28× 28		16.0	782.1
-121	37× 37	24× 24				20.0	777.1
-122	90× 78	78× 72				27.0	807.8
-123	15× 12	8× 4				8.0	789.1
-124	24× 24					39.0	795.3
-125	15× 14					12.0	802.6
-126	17× 18					33.0	801.6
-127	14× 14					34.0	800.6
-128	25+ α × 10+ α	20+ α × 6+ α				35.0	799.6
-129	46× 44					34.0	800.6
-132	109× 12					17.2	813.4
-133	141× 151	128× 138				41.0	789.6
-135	120× 122					55.0	857.6
-136	133× 130	96× 107				60.0	792.6

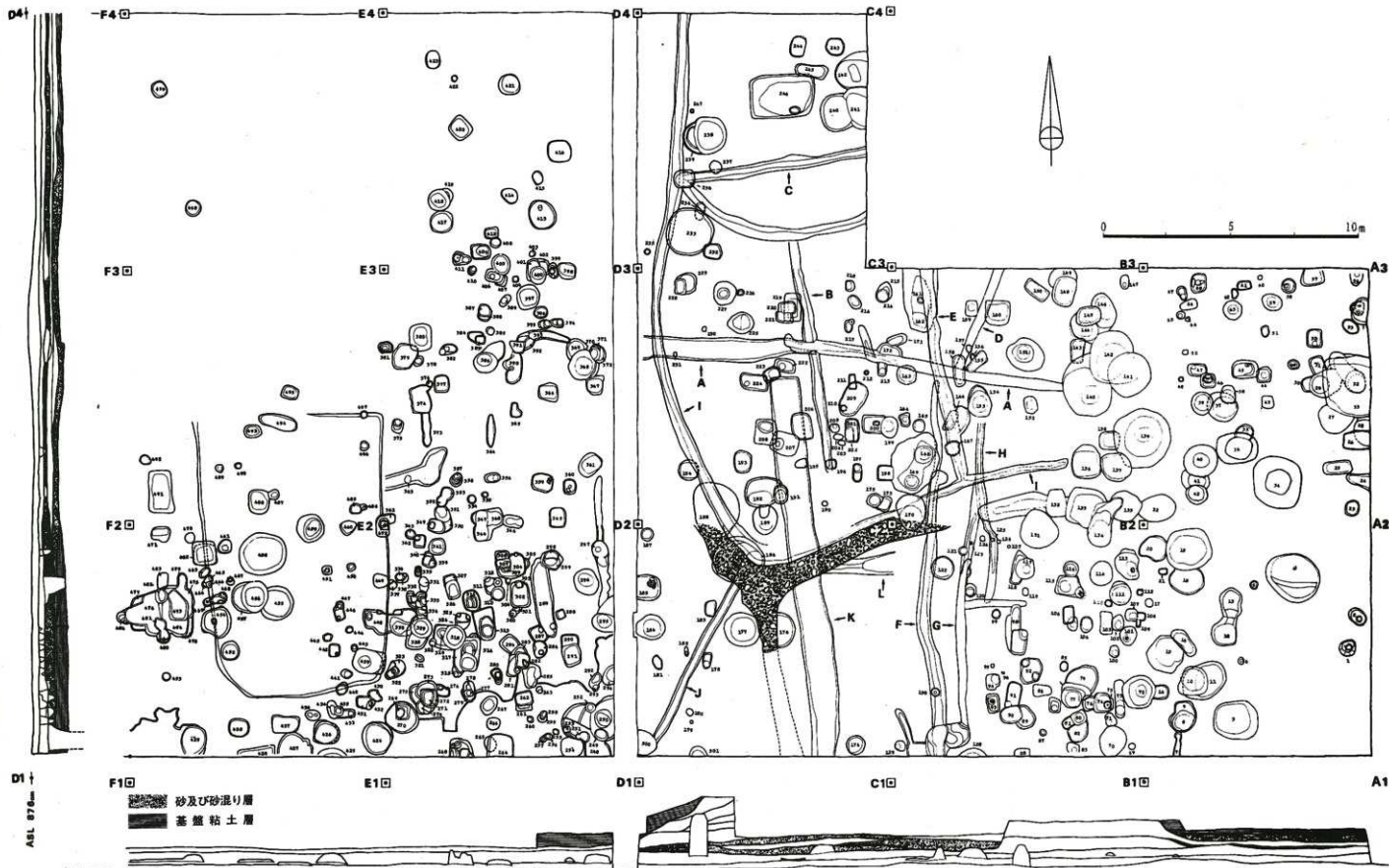
遺 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全 体 深cm	海 拔 m
-137	118×120					10.0	842.6
-141	172×175	122×132					
-147	98× 38	20× 15				29.7	803.9
-148	119×110	100×114				62.1	771.5
-149	79+ α ×111					24.3	809.3
-152	55× 52	36× 28				44.0	786.6
-154	89× 86	82× 70				39.1	793.5
-155	79× 90	76× 87				30.5	800.0
-156	30× 27	18× 12				29.5	801.1
-157	36× 24	28× 20				31.5	798.8
-158	127× 51	107× 39				22.0	808.6
-161	28× 27	14× 20				8.0	792.1
-162	248×136	128× 46				15.0	787.1
-164	57× 45	41× 33				18.7	790.6
-165	50× 50	39× 37				16.0	838.6
-166	84× 50	32× 30				11.0	787.1
-167	61× 60	50× 51				21.0	831.6
-171	48× 81	31× 60				31.0	799.6
-172	50+ α ×102+ α	35+ α ×75+ α				22.5	808.1
-174	77× 77	62× 58				36.0	760.1
-176	138×184	120×112				40.0	801.1
-179	18× 16					7.0	810.6
-180	32× 29					8.5	802.1
-181	62× 40	48× 32				18.0	821.1
-182	41× 19	17× 10				18.0	819.1
-183	67× 55	57× 35				24.3	817.6
-187	52× 51	38× 38				25.5	821.1
-189	126× 92	52× 47				19.5	816.8
-190	26× 24					5.0	797.1
-191	78× 58	60× 50		49× 42		39.7	796.6
-192	119×154	101×130	19.5	50× 90		21.1	795.7
-195	40× 49					39.3	795.1

遺構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m
-196	43× 44	33× 24				22.0	778.1
-203	18× 24					17.6	819.1
-204	28× 38					14.5	822.2
-205	37× 38	19× 19				25.3	811.5
-209	132× 97	114× 82				14.5	843.4
-210	27× 28	20× 19				15.0	786.1
-211	64× 32	48× 23				27.0	780.1
-212	22× 22	12× 10				14.0	782.1
-213	57× 40	44× 39				5.7	781.4
		24× 24					
-214	52× 52	42× 42				21.0	779.1
-215	72× 62					15.0	787.1
-216	58× 58	40× 28				22.7	811.6
-217	52× 32					20.0	780.1
-218	45× 40	33× 20				29.0	772.1
-225	86×102	61× 62	24.0	58× 34		38.3	799.5
-227	91× 70	45× 48		30× 31		45.0	749.1
-229	82× 79	78× 60+ α				22.0	812.3
-230	23× 18					13.6	820.7
-231	20× 15					40.7	793.6
-232	64× 72	54× 48				28.0	824.1
-233	185×190	164× 157				48.4	804.2
-234	74× 41	41× 31					
-235	28× 28	16× 18				22.0	771.1
-236	72× 82	60× 66				51.0	795.1
-237	56× 50					36.0	807.1
-238	146×118	110× 99				48.0	752.1
-239	130× 49+ α	122× 46+ α	13.0	89×46+ α	75×30+ α	23.0	767.1
-240	147×112+ α	125× 97+ α				25.0	764.1
-241						33.0	750.1
-242			16.0			36.0	747.1
-243	70× 74	61× 62				24.0	808.1

遺構 番 号	上段上端 cm	上段下端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下段下端 cm	全体 深cm	海 拔 m
-244	70× 61	72× 54				35.5	798.6
-245	56× 82	48×108				21.0	814.1
-246	178×256	149×234	42.0	32× 46	21×30	90.0	692.1
		130×212					
-247	20× 19	12× 10				22.0	772.1
-248						38.0	811.1
-249	47× 50	33× 40				87.5	761.5
-251	45× 52	32× 42				79.0	770.1
-252	39× 40	25× 22				48.5	804.6
-253	30× 30	22× 20				52.0	801.1
-254	75× 87					27.0	794.1
-255	24× 24	21× 20				18.0	806.1
-256	29× 30	18× 18				23.0	799.1
-257	29× 29	14× 15				16.0	805.1
-258	30× 30	23× 18				18.0	806.1
-259	37× 38					14.0	811.1
-260	30× 27	18× 17				18.0	806.1
-263	30× 28	16× 16				2.0	822.1
-264	$86 + a \times 104$	$80 + a \times 79$				20.0	831.1
-265	64× 52					28.0	796.1
-268	$72 + a \times 95$					69.0	779.6
-270	123×132	120×118				23.0	815.1
-273	82× 86	62× 68				22.0	813.1
-274	$56 \times 50 + a$	$45 \times 46 + a$				26.0	811.1
-292	66× 41	41× 22				28.0	813.1
-293	34× 27	20× 18				26.0	815.1
-294	? × 70	? × 52				78.0	748.1
-297	69× 68	63× 64		10× 8		10.0	799.6
-300	29× 30	13× 12				24.0	812.1
-305	43× ?	24× ?				23.5	831.1
-306	? × 25	? × 15				24.0	828.1
-310	57× 56	41× 40				34.0	801.1

造 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全 体 深cm	海 拔 m
-312	36× 33	13× 16				15.0	819.0
-317	133×101	127× 78	46.0	71× 71	45×49	97.0	758.1
-321	30× 39	12× 22				17.0	814.1
-324	? × 56	? × 49				14.0	842.1
-328	? × 89	? × 62				51.0	802.1
-331	66× 42	39× 42				29.0	809.1
-341	70× 70	51× 49				61.0	794.1
-350	58× 58					13.0	821.1
-351	68× 65	47× 42				54.0	779.1
-352	44× 44	43× 37				20.0	813.1
-354	38× 38	28× 25				29.0	801.1
-355	24× 27	22× 17				32.0	800.1
-363	37× 25					21.0	812.1
-364	129× 39	120× 25				78.0	805.1
-365	72× 49	50× 37				19.0	806.1
-367	72× 73	55× 58				95.0	738.1
-368	122×118	75× 69				97.0	752.1
-373	132× 40	125× 31				19.0	809.1
-374	112×106	101× 73				8.0	821.1
-376	31× 28	20× 18				18.0	811.1
-378	35× 44	24× 28				20.0	813.1
-379	199×194	86× 91				43.0	790.1
-385	34× 34	36× 28				39.0	805.1
-389	52× 52	29× 28				46.0	799.1
-390	132× 82	114× 60				13.0	814.1
-391	44× 64					25.0	804.1
-392	70× 72+ α	46× 60	15.0	36× 37	31×30	27.0	819.1
-393	36×163+ α	28×154+ α				15.0	833.1
-396	48× 57	37× 47				19.0	829.1
-398	68× 80					42.0	789.1
-401	80× 56	65× 50				56.0	787.1
-403	25× 25	24× 18				23.0	818.1

遺 構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上 段 深cm	下 段 上 端 cm	下 段 下 端 cm	全 体 深cm	海 拔 m
-405	82× 72	13× 54				75.5	718.5
-408	42× 52	31× 34				28.0	786.1
-413	114×107	107× 93	35.0	72× 18	10×14	53.0	801.1
-414	62× 68	56× 57				11.0	831.1
-415	58× 43	48× 36				10.0	829.1
-416	87× 96	80× 86				8.0	831.1
-419	60× 54					11.0	831.1
-422	28× 25	20× 18				28.0	808.1
-423	74× 68	70× 49				15.0	821.1
-424	123×118	122× 99	38.0	113×112	112×90	62.5	788.6
-425	$111 + \alpha \times 66 + \alpha$	$110 + \alpha \times 32 + \alpha$				32.0	801.1
-426	95×110	75× 89				35.0	816.1
-427	$87 + \alpha \times 130$	75×122				15.0	836.1
-428	$49 + \alpha \times 147$	$25 + \alpha \times 124$				13.0	825.1
-429	$106 + \alpha \times 100$	$82 + \alpha \times 102$				25.0	809.1
-430	50× 58	41× 46				23.0	811.1
-434	$73 \times 42 + \alpha$	$39 \times 18 + \alpha$				21.0	814.1
-435	38× 37	21× 21				43.0	791.1
-437	71×108	64× 96				15.0	836.1
-438	72× 80	62× 68				13.0	824.1
-440	53× 50	34× 34				66.0	785.1
-441	41× 45	27× 27				32.0	797.1
-443	34× 38	18× 16				27.0	800.1
-444	28× 31	17× 23				11.0	821.1
-445	32× 41	22× 25				15.0	818.1
-449	58× 65					35.0	794.1
-450	33× 35	16× 21				15.0	813.1
-452	75× 72	55× 56				59.5	794.6
-453	33× 26	33× 26				28.0	806.1
-454	119×120	103× 90	37.0	24× 22	15× 11	59.0	796.1
-455	138× ?	100× ?				38.5	816.6
-457	123× ?	102× ?				53.0	799.1



第33図 下筋生田畑田遺跡遺構全体図

遺構 番 号	上 段 上 端 cm	上 段 下 端 cm	上段 深cm	下段上端 cm	下 段 下 端 cm	全体 深cm	海 拔 m
-458	169×189	128×152				58.0	795.1
-460	59× 66	50× 61				28.0	825.1
-463	53× 32	39× 20				6.0	829.1
-464	24× 23	11× 9				30.0	821.1
-465	35× 37	20× 12				29.5	818.6
-466						24.0	827.1
-470	43× 41					6.0	828.1
-473	119×110	71× 57				56.0	792.1
-474						32.0	816.1
-475						41.0	808.1
-476	176× 77?	160× 60?				44.5	807.6
-477	141×129					25.5	825.1
-478						16.0	832.1
-479	? × 40	? × 27				25.0	820.1
-481	44× 55					55.0	793.1
-482	57× 49	45× 28				46.0	799.1
-483	63× 43					29.0	815.1
-484	39× 30+ α	17× 24+ α				33.5	817.1
-486	26× 29?	10× 10				20.0	814.1
-487	42× 44	20× 24				23.0	804.1
-488	97× 70	80× 63				52.0	775.1
-489	34× 35	17× 21				13.0	811.1
-490	27× 29	19× 20				29.0	795.1
-491	164× 90	136× 72				38.0	799.1
-492	41× 32	47× 35				21.0	807.1
-493	52× 69	36× 49				11.0	814.1
-494	62×155	51×139				28.0	821.1
-495	54× 68	40× 50				39.0	812.1
-496	40× 35	23× 28				25.0	803.1
-497	32× 30	22× 21				16.0	813.1
-498	65× 63	53× 51				17.0	818.1
-499	68× 50	53× 45				20.0	809.1

第3節 遺物

1 遺物概説

本遺跡の出土遺物には、律令・江戸時代の主に2時代の品がある。そして、それらの内には、土器類、銭貨、石製品、木製品、金属製品、土製品などがある。以下、これらを各時代ごとに報告する。

2 遺物各説

1) 古墳時代

古墳時代の遺物としては碧玉製の管玉が1点ある。縦に半分以上が欠けているために正確な計測値を示すことが出来ないが、直径が11mmで長さが27mm以上ある。縦に半分が欠失しているために穿孔の観察は容易で、1.5mmの孔が両側から穿たれているが、玉錐の中心を決める打痕は後の欠損の痕跡と紛らわしくて判別できない。碧玉は濃緑色を呈する硬いもので光沢のあるものである。(冨山) 第34図 碧玉製管玉



実測図

2) 律令時代

律令時代の遺物には、土器類、土製品、瓦、銭貨等がある。

土器類 (第36図)

律令時代の土器は、遺跡の縁辺に出土しており、中央部では極めて希薄な出土状態である。なお、出土土器の個別の詳細は観察表に譲り、主要な品のみについて説明したい。

須恵器(第36図 1~38)

土器類としては須恵器の坏A(1~16)・坏B(17~23)・皿A(30~32)・盤A(33~37)・盤B(38)・蓋(24~29)がある。坏Aは口径が8.5cmのもの(1)を除いて13cm前後で、器高が3.0~3.5cm多い。坏Bは前記の坏Aに高台を付けたもの(17~19)と大型の坏Aに高台を付けたもの(20~22)がある。皿Aは底部から緩やかに口縁部まで延びたもので、15.5cm前後の口径をもち、器高は2cm強と低い。盤Aは底部から屈曲して口縁部まで延びたもので、16cm強の口径をもち、器高は2.5cm前後と低い。盤Bは前記の盤Aに高台を付けたものである。蓋は内面の高さが1cmに満たないもの(24・25)と2cmに近いもの(27~29)があり、口径も13cm前後のもの(26・27)と16cm前後のもの(24・25・28・29)がある。

これらの須恵器の中には墨書されていたものもある。調査前に【廣嶋】と墨書されていた須恵器を表採し、器種は蓋で内面に書かれている。【中】は坏Aに多く書かれ、殆どが底部の外面である。墨書の字句は上筋生田遺跡で検出したSD-006の旧河道から出土した墨書土器の字句と同じものがあり、SD-006の延長と思われる旧河道も検出した。

土製品 (第35図)

土製品としては土錘が2点出土している。1点は長さが5cm、径1.5cmで両端が丸みを持つ円筒形をしている。他は中央に稜を持つ紡錘形で最大径が2.8cmで、長さは先端が欠失しているために計測ができない。胎土は同時期の土器と同様である。第35図 土錘



実測図

第8表 下筋生田畑田遺跡出土土器観察表

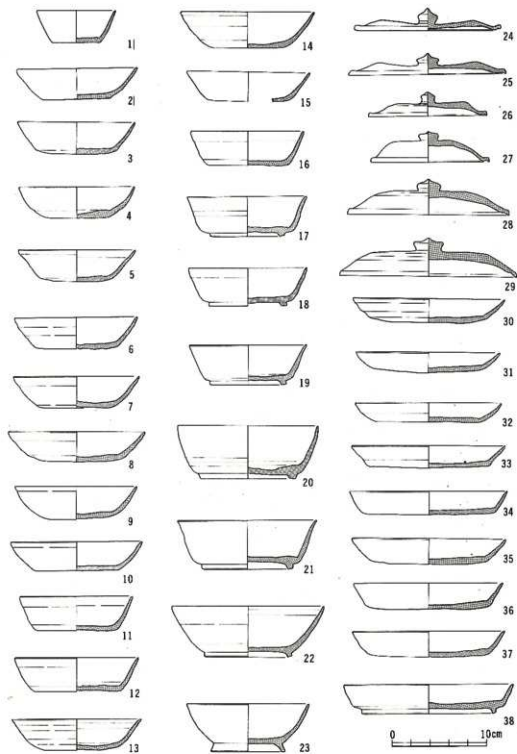
器名	土器	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	胎土・質	色調	備考
環	1	口径 8.2 器高 3.4	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上へにのびる。	体部は回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	灰色	5/7遺存
環	2	口径 12.5 器高 3.2	体部は底部から明瞭に屈曲し、内湾さみにのびる。	体部は回転ナゲ調整する。	微砂粒を含む。	灰白色	2/3遺存 底部外面に墨痕あり。
環	3	口径 12.4 器高 3.3	底部はわずかに丸みをもつ。体部は底部から直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	微砂粒を若干含む。	灰白色	4/7遺存
環	4	口径 12.2 器高 3.3	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、内湾する。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	微砂粒を多く含む。	灰白色	1/2遺存 口縁部に煤が付着。
環	5	口径 12.2 器高 3.3	体部は直線的に外上へへのび、体部中程でやや外反する。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	灰白色	1/3遺存
環	6	口径 13.0 器高 3.3	体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	砂粒を若干含む。	青灰色	2/5遺存
環	7	口径 13.2 器高 3.3	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	灰白色	3/4遺存
環	8	口径 14.4 器高 3.2	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	朱灰色	4/7遺存
環	9	口径 12.8 器高 3.5	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	微砂粒を含む。	黄灰色	2/5遺存
環	10	口径 13.8 器高 3.0	体部は底部から明瞭に屈曲し、やや内湾さみにのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	灰白色	5/6遺存
環	11	口径 11.8 器高 3.6	箱形を呈する。体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整する。	微砂粒を含む。	灰白色	1/3遺存
環	12	口径 13.0 器高 3.6	箱形を呈する。体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上へへのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナゲ調整し、内面は仕上げナゲ調整する。	微砂粒を若干含む。	灰色	2/5遺存
環	13	口径 13.6 器高 3.3	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、わずかに内湾しながらのび、口縁部でやや外反する。	体部は回転ナゲ調整する。	砂粒を若干含む。	青灰色	3/5遺存
環	14	口径 14.0 器高 3.8	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、わずかに内湾しながらのびる。	体部は回転ナゲ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りする。	砂粒を多く含む。	明灰色	4/5遺存
環	15	口径 13.0 器高 3.1	体部は底部からやや丸みをもって立ち上がり、直線的に外	体部は回転ナゲ調整する。	砂粒を含む。	青灰色	1/3遺存

			上方へのびる。				
坏 A	16	口径 11.8 器高 3.6	扇形を呈する。体部は底部から明瞭に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	2/5適存
坏 B	17	口径 12.6 底径 7.8 器高 4.2	内面端部は接合面とする断面方形の高台をもつ。 体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部でやや外反する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘタ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	暗灰色	3/4適存
坏 B	18	口径 12.4 底径 8.2 器高 4.0	断面方形の高台をもつ。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘタ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	2/5適存
坏 B	19	口径 12.4 底径 8.1 器高 4.2	断面方形の高台をもつ。体部は底部から明瞭に立ち上がり、直線的に外上方へのびるが、口縁部でやや外反する。	体部は回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	暗灰色	2/3適存
坏 B	20	口径 14.7 底径 10.0 器高 5.6	断面方形の高台をもつ。体部は直線的に外上方へのび、口縁部で上方に屈曲する。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色	3/7適存
坏 B	21	口径 14.6 底径 9.6 器高 5.2	内面端部は接合面とする断面方形の高台をもつ。端部は直線的に外上方へのびるが、口縁部強く外反する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘタ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	暗灰色	2/3適存
坏 B	22	口径 16.0 底径 9.3 器高 5.4	内面端部は接合面とする断面方形の高台をもつ。体部は内側より平らな。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘタ切りの後に回転ナデ調整し、内面は仕上げナデ調整する。	砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色	2/5適存
坏 B	23	口径 12.8 底径 7.8 器高 5.0	断面方形の器高の高い高台をもつ。体部は底部から内側しながら口縁に至る。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	暗灰色	3/4適存
蓋	24	口径 15.4 器高 2.3	宝珠形のツマミをもつ。天井部は平たく、天井部から口縁部へはやや外反ぎみに移行する。	体部は回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰色	2/5適存
蓋	25	口径 16.6 器高 2.2	宝珠形のツマミをもつ。天井部は平たく、天井部からやや外反ぎみに移行する。口縁部はわずかに下方に折り返す。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を多く含む。	灰白色	3/4適存
蓋	26	口径 12.4 器高 2.5	宝珠形のツマミをもつ。天井部は平たく、天井部から外反ぎみに移行する。口縁部はわずかに下方に折り返す。	体部は回転ナデ調整する。 天井部内面に仕上げナデ調整する。	微砂粒を多く含む。 焼成良好	暗灰色	2/3適存
蓋	27	口径 12.4 器高 3.2	扁平な宝珠形のツマミをもつ。天井部は平たく、大きく内側しながら口縁に至る。口縁部は下方に折り返す。	体部は回転ナデ調整する。 天井部内面に仕上げナデ調整する。	砂粒を含む。 焼成良好	暗灰色	2/5適存
蓋	28	口径 17.0	扁平な宝珠形のツマミをもつ。	体部は回転ナデ調整する。	砂粒を多く含む。	黄灰色	4/5適存

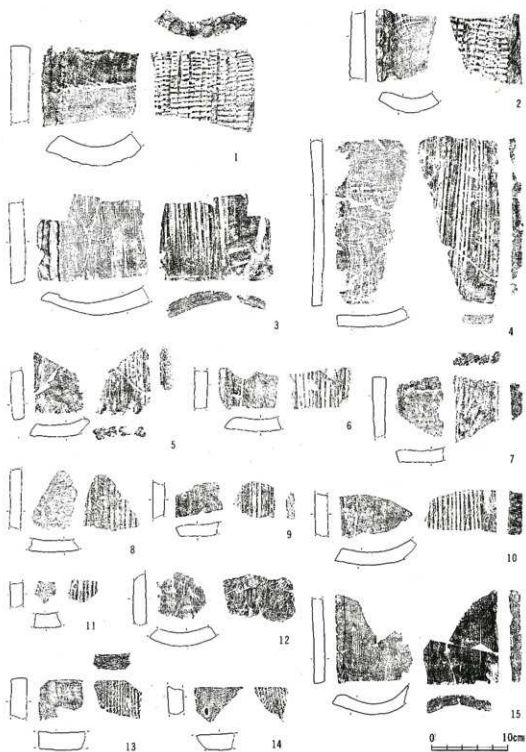
		器高 3.7	天井部は平たく、明確に屈曲し、内湾みに口縁に至る。口縁端部はわずかに下方に折り返す。	天井部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	む。 焼成良好		
並	29	口径 18.6 器高 4.0	扁平な宝珠形のフタをもつ。天井部は平たく、明確に屈曲し、内湾みに口縁に至る。口縁端部はわずかに下方に折り返す。	体部は回転ナデ調整する。 天井部外面に回転ヘラ切り痕を残す。	砂粒を多く含む。 焼成良好	灰白色	3/4遺存
並	30	口径 16.0 器高 2.5	体部は底部から丸みをもって立ち上がり、内湾みに外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色	1/3遺存
並	31	口径 15.2 器高 2.2	体部は底部からわずかに丸みをもってやや内湾みに外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	暗灰色	2/5遺存
並	32	口径 15.4 器高 2.0	体部は底部から明確に屈曲し、やや内湾みに外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	4/5遺存
並	33	口径 16.2 器高 2.3	体部は底部から明確に屈曲し、直線的に外上方へのびて体部中段で内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	1/3遺存
並	34	口径 16.6 器高 2.5	体部は底部からやや丸みをもって屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	砂粒を多く含む。 焼成良好	灰白色	2/3遺存
並	35	口径 16.2 器高 2.7	体部は底部からやや丸みをもって屈曲し、直線的に外上方へのびて口縁部でわずかに内湾する。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	2/5遺存
並	36	口径 15.7 器高 2.7	体部は底部からやや丸みをもって屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を含む。 焼成良好	灰白色	3/5遺存
並	37	口径 16.0 器高 2.7	体部は底部からやや丸みをもって屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色	6/7遺存
並	38	口径 17.8 底径 14.1 器高 3.1	内腹縁部を接合面とする断面方形の高台をもつ。体部は底部から明確に屈曲し、直線的に外上方へのびる。	体部は回転ナデ調整する。 底部外面は回転ヘラ切りの後に回転ナデ調整する。	微砂粒を若干含む。 焼成良好	灰白色	3/5遺存

瓦 (第37図 1～15)

瓦は16点出土しており、軒瓦はない。平瓦の叩きは正格子(1・2)、平行(3～11)、縄(12～14)がある。正格子は格子が長方形で荒い粗雑な叩きである。格子の方向は側縁に平行に叩いている。平行は正格子同様に荒く側縁と平行に叩いている。縄は原体に縦方向に縄を巻いて側縁と平行に叩いている。これらは足羽川対岸の福井市篠尾町にある篠尾廃寺からの出土瓦に類似している。



第36圖 下筋生田畑田遺跡出土須恵器実測図（1～38）



第37圖 下筋生田畑田遺跡出土古瓦実測圖（1～15）

銭貨

皇朝12銭の隆平永寶がある。保存状態が極めて悪いために図化することは出来ないが、総数15枚以上が重なっている。そのために総てが隆平永宝と断定出来ないが、判読可能な部分から読み取れた字句は隆平永宝に関するものである。

3) 江戸時代

江戸時代として取り扱う遺物の中には中世末期のものもあり、中世末期から近世初頭の混乱のなかで営まれた遺跡からの出土品である。遺物には陶器・磁器・土器・石製品・木製品・金属製品がある。

陶器(第38図 1~16・第39図 1~5・第41図 9~10)

産地を抱える関係上大型の日常雑器はすり鉢等殆どが越前焼である。小型の陶器は瀬戸・美濃製陶器と唐津焼が殆どで、朝鮮製陶器が僅かに混じっている。

越前焼(第41図 9~10)

摺鉢が多く出土しているにも拘わらず、大型の甕のようなものは見当たらない。小型のものはお歯黒壺のようなものは出土している。摺鉢は轆轤で引かれた痕跡はなく、平らな底部は砂敷きの上に置かれて製作されている。底部直上の外面には荒縄で台から外した痕跡が強く残っている。平底から直線的に外上方に延ばし、口縁の端部を内傾させて鋭く切り落としている。切り落とした端部と口縁の外面は強く横ナデされている。櫛目は見込みの中心を通ずるように端部から端部まで一杯にひかれている。

A) 瀬戸・美濃製陶器(第38図 1~16)

天目茶碗(1~7)はヘラグリの中央が浅くなる高台から鋭く鋭削りされた腰があり、直線に外上方に延びて口縁で屈曲している。釉調は黒褐色の鉄釉が懸けられ、鬼板にも化粧懸けが施されている。これらには口径に比較して丈の低いもの(1~3)と高いもの(4~7)がある。低いもの(1・2)は口径が11.5cm前後で器高が6cmのものが殆どである。1例のみ極めて小さいもの(3)があり、口径は6.3cmである。これは茶碗に使用することではなく、盃として使用したのであろう。丈の高いもの(4~7)は口径が11.5cmで器高が8cmほどである。高いものの胎土は低いものに比較して白っぽく軟弱である。低いものが16世紀中葉に、高いものは17世紀前葉に比定される。

鉄釉水注(8)は1点のみ出土している。土瓶型の水注で貫通する注口部の先端が欠失している。注口部の直上と反対側に紐作りの耳を1対貼りつけている。底は糸切りのままで、片側が強く火を受けている。これは16世紀前葉に比定される。

灰釉皿は折縁の皿(9)と内はげの皿(10)がある。内はげの皿(10)は内側を浅く削ったら高台から大きく開き段を持って外上方に直線的に延びている。高台に比して見込みが広く、釉がない。外面の底部にはビードロ状の灰釉が厚くたまっている。折縁の皿(9)には内面に甕で連続して花卉を掘り込み、菊皿にしている。前者が16世紀中葉、後者が16世紀後葉に比定される。

志野筒向付(12・13)は殆ど完全な状態で2点出土している。底は浅い蔀筒底にして長石釉は薄

い。内面に轆轤引きの痕が明確に残る。これらは16世紀後葉に比定される。

志野織部皿(14~16)は全体像が明らかなものが3点出土している。長石釉が全体にかけられ、低い高台の内側が薄い。縁に一条と見込みの周りに二条の円を描き、見込みに竹葉の文様が描かれている。これらは17世紀前葉に比定される。

B) 唐津焼(第39図 1~6)

皿が多く出土している。溝縁の浅い皿(1)は葎筈底の内面が兜布状に浅くなっている。窯詰めには砂1で重ねられ、赤褐色の胎土に白い長石釉がかけられている。低い高台の内面が兜布状に浅くなる皿(2・3)は口縁部の内面が緑溝の萌芽を思わせる僅かな凸帯が一周している。窯詰めには胎土1で重ねられ、灰色の木灰釉がかけられている。花生か徳利の肩部の大きな破片(6)がある。頸部まで白色の釉がかけられ、肩部以下に鉄釉がかけられている。内面の観察から轆轤を轆轤で引いて消している。胎土は黒色粒を含む灰色で堅く焼き締まっている。

窯詰めの際に残される胎土目と砂目の痕跡や、皿の口縁に残る溝縁がこれらの遺物の時期を16世紀末から17世紀初頭に推定させる。

C) 朝鮮製陶器(第39図 7~20)

個々に朝鮮製の陶器としたものには国産品とも中国製品とも類別が出来なかったものがある。14片の破片が出土しているが、2個体の破片である。1点(7)は小形の壺の胴部であると思われる。球形の胴部の破片は外面にだけ濁った緑色の釉が薄くかかっている。胎土は非常に薄く焼き締まっていて、暗紫色で白色粒が僅かに含まれている。内側には叩き目を消したような痕跡がある。他は1個体の壺の破片(8~20)で外面には褐色の釉がかけられ、無施釉の内面には同心円の叩き目が胴部全面に残っている。これらの破片は非常に薄く引きあげられている。この資料については朝鮮製の可能性が大きいが、国産品(唐津)の可能性も残している。

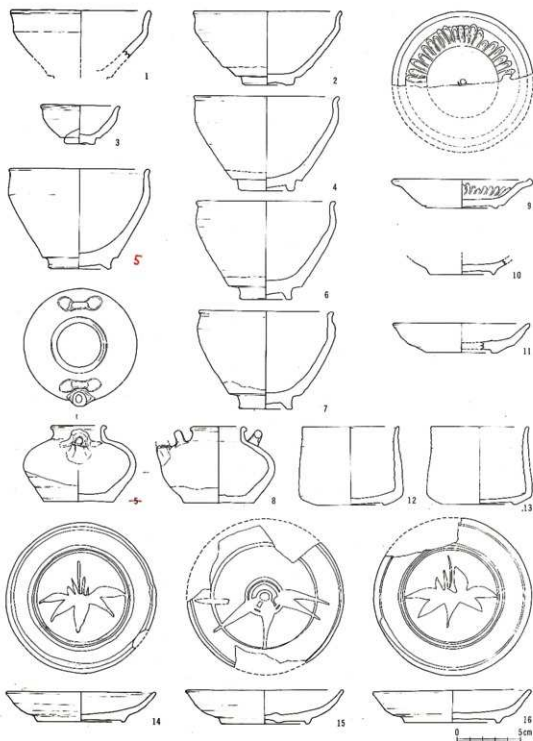
磁器(第39図 21~24)

国内産の磁器は伊万里焼が殆どを占めるが、中国製磁器・朝鮮製磁器が僅かに混じっている。舶載品は白磁・青磁の伝世を考えさせる時期の製品で小破片である。伊万里焼は染付けである。小形の頸部の長い壺(22)は花生か徳利であろう。外面の胴部に草文を一面だけに描いている。これは17世紀中葉に比定される。低い高台をもつ大振りの湯呑み風の茶碗(24)は染付の粗くくずれた唐草文が器面を廻っており、釉調は青黒い色をしている。胎土は磁器のようではなく、「半磁器」と呼ばれるものに近い。これは佐世保市江永古窯でみられるものである。

土師質土器

土師質土器は灯明皿、カワラケ等がある。灯明皿に使用された皿には、下皿として底部に粘土で3個の突起を付け、うちの柄のように把手がついているものがある。これは熱い灯明皿に直接触る事なく移動するために考案されたもので、一乗谷朝倉氏遺跡の中世遺構からの出土例はない。このような下皿は江戸期に入ってから出現するようである。

カワラケの口径は灯明皿とほぼ同じで土師皿と言われるような中型、大型の皿はない。



第38圖 下菟生田知田遺跡出土 瀬戸・美濃製陶器実測図(1~16)



第39図 下筋生田畑田道跡出土 唐津焼(1~6)・朝鮮製陶器(7~20)・伊万里焼(21~24)・漆器(25・26)実測図

石製品（第40～51図）

本地区にて出土した石製品は数量的にもさることながら、その種類の豊富さにおいて、従来の石製品の認識を大きく越えるものである。

しかし、出土点数の多さの割には完成品が少ないなど、その全体の様相ははっきりしない。また、用途すら判明しないものも数多くある。ここでは石臼・火炉・その他の遺物の大きく3つに分けて述べていく。

A) 石臼（第40～44図）

石臼は上臼19点、下臼15点、上臼・下臼の判別が不可能なもの11点の計45点が出土している。そのうち完形、またはそれにちかいもので目がよく残っているものを中心として上臼7点、下臼8点を図示した。

直径は推定復元も含めて39～34cmを測るものがほとんどである。分画数は7分画が2点のみで他は8分画である。使用方向は判別したものがすべて、逆時計廻りである。石質も第65図3の1点が砂岩のほかはすべて緑色凝灰岩である。

いずれの臼も、破損するか、かなり低くなり薄くなるまで使用されており、その使用の激しさを伺わせるものである。

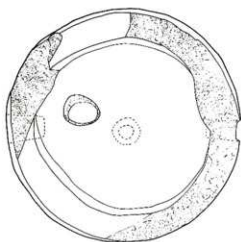
ほとんどが緑色凝灰岩を用いて、直径を30cm強にし、目を8分画に取り、逆時計廻りに使用している。このことは石臼が規格性をもってつくられていることを示す。

第9表 下蒔生田畑田遺跡出土石臼一覧表

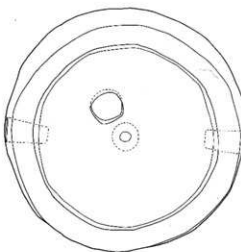
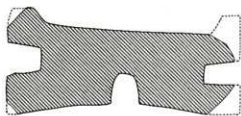
遺構番号	分画数	上臼	下臼	使用方向	直 径	高 さ	石 質	図版番号
S K-011	8		○	逆時計廻り	32.0	10.0	緑色凝灰岩	第44-13
S K-011	8		○	逆時計廻り	35.6		緑色凝灰岩	第44-14
S K-027		○			32.0		緑色凝灰岩	
S K-033			○	逆時計廻り			緑色凝灰岩	
S K-038	8		○	逆時計廻り	32.0	14.5	砂 岩	第43-10
S K-038 (8)			○	逆時計廻り			緑色凝灰岩	
S K-040		○		逆時計廻り			緑色凝灰岩	
S K-040							緑色凝灰岩	
S K-057	8		○	逆時計廻り	29.5	9.0	緑色凝灰岩	第43-9
S K-073			○	逆時計廻り	33.0	11.0	緑色凝灰岩	第44-12
S K-111				逆時計廻り	29.2		緑色凝灰岩	
S E-140				逆時計廻り	30.0		緑色凝灰岩	
S E-140		○			36～37		緑色凝灰岩	

第9表 下筋生田畑田遺跡出土石臼-覽表

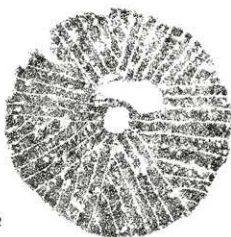
遺構番号	分画数	上臼	下臼	使用方法	直 径	高 さ	石 質	図版番号
SK-143		○					緑色凝灰岩	
SK-148	(8)	○		逆時計廻り	34.0	13.4	緑色凝灰岩	第42-6
SE-168		○		逆時計廻り	32.0		緑色凝灰岩	第42-7
SK-170							緑色凝灰岩	
SK-170							緑色凝灰岩	
SK-174	8	○		逆時計廻り	34.2	12.5	緑色凝灰岩	
SK-176				逆時計廻り			緑色凝灰岩	
SK-180			○		32.0		緑色凝灰岩	
SK-185		○			30.0	9.5	緑色凝灰岩	第41-3
SK-222	7	○		逆時計廻り	30.0	12.5	緑色凝灰岩	第40-2
SK-230	(8)	○		逆時計廻り	(32.0)		緑色凝灰岩	第42-5
SK-230		○			30.0		緑色凝灰岩	
SK-234			○		29.0	9.5	緑色凝灰岩	
SK-262	8		○	逆時計廻り	29.7	8.5	緑色凝灰岩	第43-9
SK-271	8		○	逆時計廻り	32.9	13.0	緑色凝灰岩	第43-11
SK-295			○		30~32		緑色凝灰岩	
SK-361		○			32.8		緑色凝灰岩	
SE-500		(○)					緑色凝灰岩	
SE-501	7	○		逆時計廻り	30.0	14.5	緑色凝灰岩	第40-1
SD I	8		○	逆時計廻り	30.0	12.5	緑色凝灰岩	第44-15
SD I		○					緑色凝灰岩	
包含層	(8)		○	逆時計廻り	31.0	7.0	緑色凝灰岩	第43-8
包含層	(8)	○		逆時計廻り			緑色凝灰岩	
包含層		○			32.0		緑色凝灰岩	
包含層	8		○	逆時計廻り	33.0	13.5	緑色凝灰岩	
包含層			○				緑色凝灰岩	
包含層		(○)					緑色凝灰岩	
包含層		○		逆時計廻り	32.0		緑色凝灰岩	
包含層		○			(32.0)		緑色凝灰岩	



1

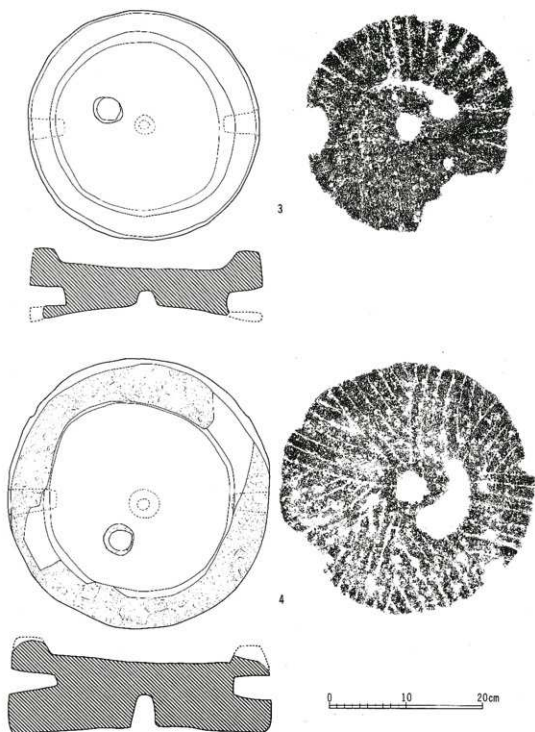


2

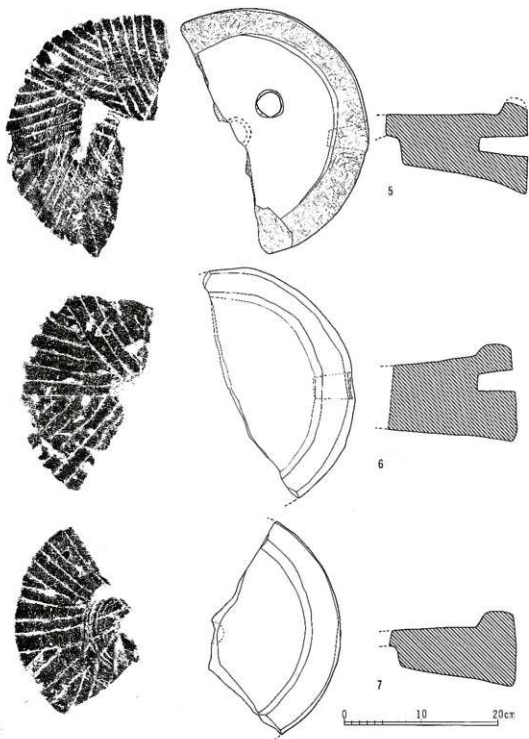


0 10 20cm

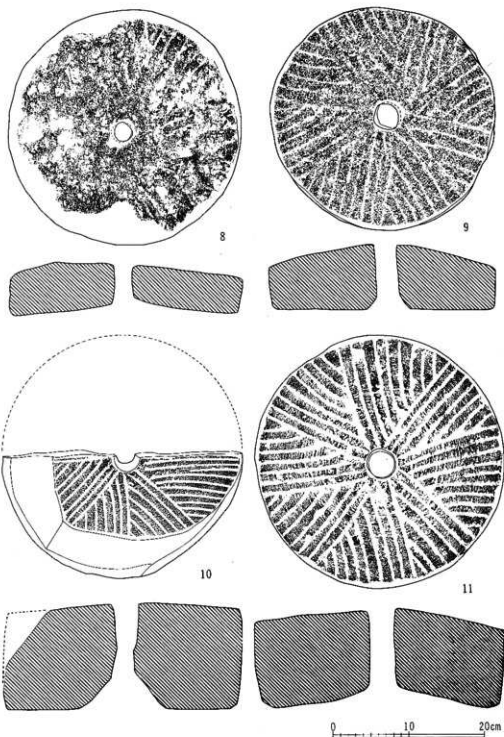
第40圖 下筋生田畑田遺跡出土石白夷測圖1 (1・2)



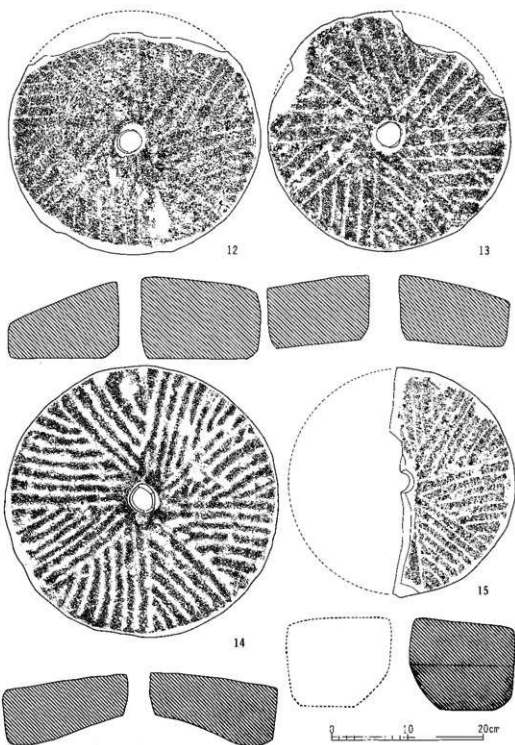
第41圖 下筋生田畑田遺跡出土石臼実測図2 (3・4)



第42圖 下筋生田畑田遺跡出土石臼矢測圖3 (5~7)



第43圖 下蘇生用畑田遺跡出土石白実測圖 4 (8~11)



第44圖 下筋生田畑田遺跡出土石臼実測図5 (12~15)

B) 火炉 (第45～47図・第48図 23～26)

火炉は、福井市を中心とする地域で、バンドコと呼ばれる暖房器具（アンカ）である。

ここでは、蓋9点、身17点を図示した。図示した以外にも火炉と考えられるものは多数あるが、小片のため、平面形が判別できず、取り上げなかった。

第10表火炉蓋一覧表

遺構番号	平面形	残り具合	長径	短径	厚み	高さ	炭の付着	図版番号
SK-011	D	ほぼ完形	17.4	15.5	3.3	3.6	内面全面	第45図1
SK-027	楕円	1/2	(11.8)	13.5	2.5	3.3	なし	第45図7
SK-072	D	1/2	(10.8)	15.7	3.0	4.0	内外面一部	第45図5
SK-084	D	ほぼ完形	19.4	15.6	3.2	3.6	内面全面	第45図2
SK-136	楕円	1/2	(10.9)	(14.6)	3.5	3.3	なし	第45図6
SK-170	D	1/3	(9.3)	(11.7)	3.0	3.5	内面と外面の一部	第45図4
包含層	D	1/4	(9.5)	(11.3)	3.2	3.7	内面一部	第45図3
包含層	D	1/2	(12.5)	(18.5)	2.3	3.0	なし	第45図9
不明	楕円	1/2	(10.8)	16.5	2.3	3.0	なし	第45図8

第11表火炉身一覧表

遺構番号	平面形	残り具合	長径	短径	厚み	高さ	炭の付着	図版番号
SK-033	楕円	2/3	24.7	18.3	2.8	(9.3)	なし	第48図28
SK-038	D	1/2	(10.1)	(18.7)	2.3	(8.8)	なし	第46図10
SK-072	D	1/4	(10.7)	(11.1)	3.5	3.6	前面・底部・外面全面	第47図19
SK-082	D	1/2	(11.3)	(16.1)	3.5	(7.0)	なし	第46図12
SK-77～79	D	1/3	(9.0)	(16.5)	2.3	(7.8)	なし	第47図23
SK-084	D	1/4	(11.7)	(10.8)	3.1	(7.5)	前面一部	第46図14
SK-084	D	1/3	(7.2)	(13.7)	3.3	14.3	側内面中位	第47図22
SK-084	D	1/4	(7.2)	(14.0)	3.2	(8.0)	底部外面・側面一部	第47図24
SK-143	D	1/7	21.0	15.0	2.0	(7.0)	底部外面全面	第46図15
SK-144	D	1/4	(12.7)	(8.0)	2.0	(7.0)	底部内面・外面全面	第47図19
SE-168	開口	3/4	(18.5)	(14.8)	4.0	18.5	内面一部・底部外面	第48図25
SK-185	D	1/3	(10.5)	(12.4)	2.0	(4.0)	底部外面	第47図21
包含層	D	1/2	(20.1)	(17.8)	(2.2)	(8.8)	なし	第46図11
包含層	D	1/2	(23.7)	20.9	2.8	(7.1)	なし	第46図11
包含層	D	1/5	(12.0)	(11.4)	3.0	(7.2)	なし	第47図20
包含層	D	1/4	(19.9)	(8.5)	(2.1)	12.0	なし	第48図27
不明	開口	1/8	(12.5)	(8.8)	4.5	(6.6)	なし	第48図26

形態は蓋（第45図1・2・4・5・9）・身（第46図10～15・第47図16～22）のようにD字形の平面形を呈するものと、蓋（第45図6～8）・身（第48図25・26）のように楕円形を呈するもの、さらに火炉（アンカ）として使用されたと考えるよりも、手焙りとしての使用方法が考えられ、一側面が大きく開口するもの（第48図23・24）の3つのタイプがある。

また、D字形においても、奥行きよりも幅が長いもの（第45図1・2）と奥行きが幅よりも長いもの（第45図9）の2つのタイプに分類することができる。一側面が大きく開口するタイプは類例が少ない。ここでは完形ではないが、おおよその形が窺うことができるもの（第48図23）と、口縁上辺部と考えられるもの（第48図24）の2点を図示した。

平面形は判別できなかったが、蓋の表面に十字の図形を線刻しているもの（第67図3）も図示した。図形が何を意味するかは不明である。

本遺跡では蓋と身の合計数がD字形のもの18点、楕円形のもの5点と、D字形の点数が3倍以上もある。これは、特に身において楕円形と判別できず取り上げなかったものもある。しかし、この点を考慮してもD字形の火炉が半数以上を占めることであろう。

C) その他の石製品（第48図27～29、第49図、第50図）

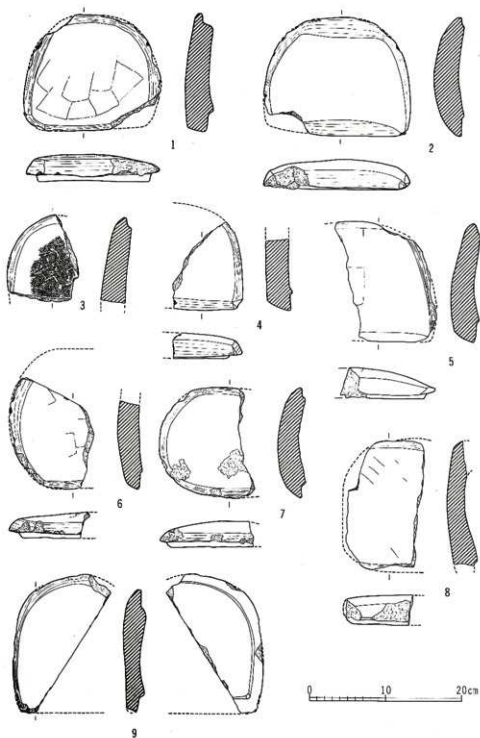
ここでは石臼・火炉以外のものをまとめて取り上げる。石質は砥石（第50図10～14）を除きすべて緑色凝灰岩である。

第48図27～29は石製の箱形容器である。火炉より小さく、形態も異なるため火炉とは別に取り上げた。27はSK-131出土。奥行き6.0cmを残し、幅14.2cm、高さ8.7cmを測る。前面隅に脚2本を持つ。28はSK-3出土。奥行き14.3cm、幅10.1cmを残し、高さ8.7cmを測る。前面に動物らしきものを線刻する。29はSK-92出土。奥行き11.2cmを残し、幅13.6cm、高さ7.5cmを測る。中央に仕切りを作る。前面隅に脚2本を持つ。27～29の3点とも火炉と比較して、全体に作りが小さく、内外面ともに工具痕を残さないように調整されている。

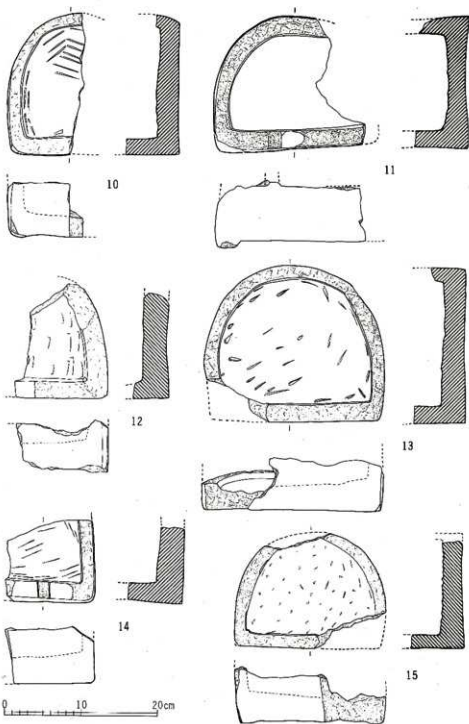
第49図1は平面形が扇形を呈する石製の容器である。SK-40出土。奥行き26.2cm、幅30.4cm、高さ13.6cmを残す。弧に当たる部分を前面とし、その中央に液体を注ぐ口のような切り込みを持つ。第49図2は灯火台である。SK-54出土。長径25.0cm、短径24.3cm、高さ16.0cmを測る。4脚のうち1脚が欠失する。上面の中央に凸部を残し、周囲を浅く掘りくぼめている。中央の凸部を中心に炭が付着しており、灯火の際、この部分に芯を置き、周囲に油をためていたのではないかと考えられる。

第49図3は組み合わせ五輪塔の火輪である。包含層出土。軒先の一辺が20cm、高さ13.1cmを測る。屋根に反りをもたせ、軒先をやや跳ね上げ、軒面を内側に切り落とす。頂部に上面形8.3cm、底面径5.1cm、深さ5.1cmの円形の孔をつくる。底面にも深さ1.8cmほどの落ち込みをつくる。隅の一部が欠失するものの、ほぼ完形品である。

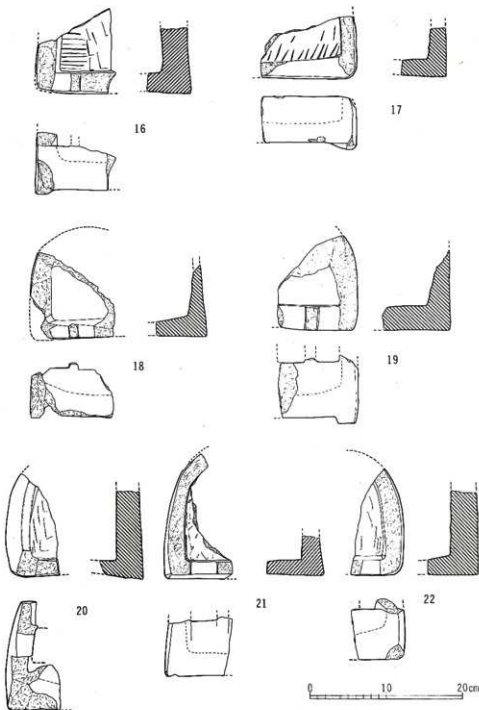
第49図4は組み合わせ五輪塔の水輪である。包含層出土。推定の上面径18.5cm、最大径24.5cm、下面径16.1cm、高さ16.0cmを測る。正円形の上下面を切り取った形を呈する。上下とも浅い。



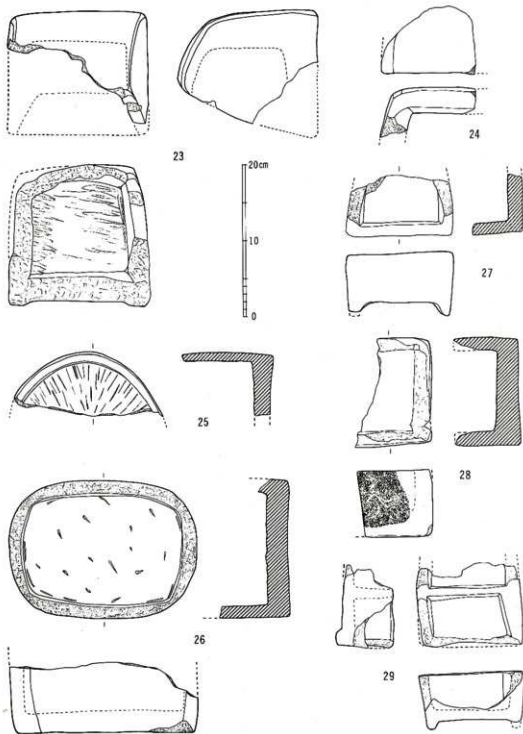
第45圖 下助生田畑田遺跡出土火鉢蓋実測図(1～9)



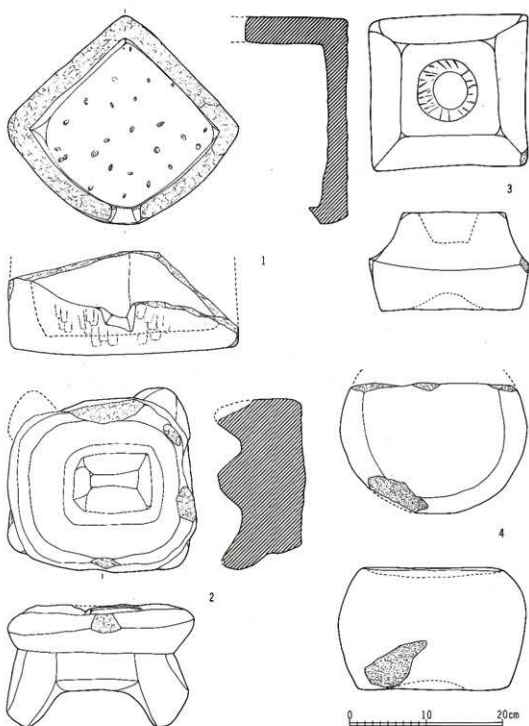
第46図 下蕨生山畑山遺跡出土火炉身実測図1 (10~15)



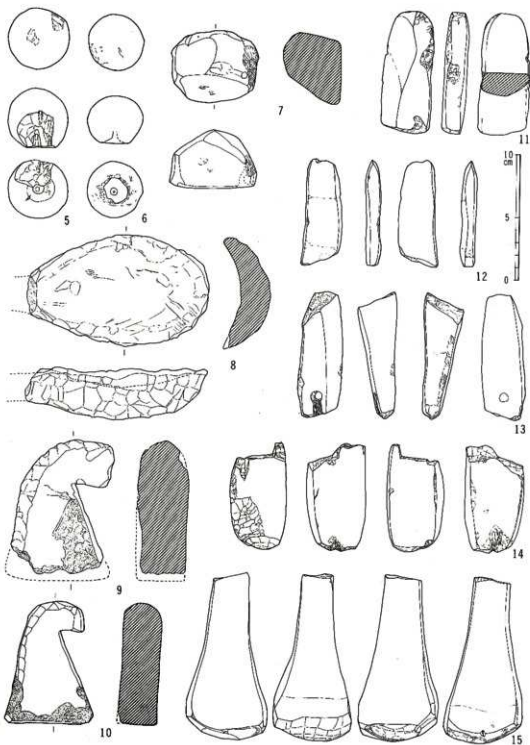
第47図 下筋生山畑田遺跡出土土火炉身実測図2 (16~22)



第48図 下筋生畑田遺跡出土火葬・その他の石製品実測図 (23~29)



第49図 下筋生田畑山遺跡出土その他の石製品実測図（1～4）



第50図 下勸生山畑田遺跡出土その他の石製品実測図 (5~14)
15

落ち込みを掘りくぼめている。残存面での梵字は見られない。

第50図 5～8は不明石製品である。5はSK-141出土。直径4.7cm、重さ120gを測る。6は包含層出土。直径4.4cm、重さ90gを測る。2点とも球形を呈し、1ヶ所を切り取り、平坦面をつくって、その中央に深さ2cmの孔を穿つ。工具痕を残さないように全面調整されている。孔の部分に何かを差し込み使用する際の握りであろうか。7はSK-139出土。長径7.0cm、短径5.8cm、高さ4.7cm、重さ200gを測る。一面に大きく平坦面をつくり、反対側との両面から穿孔して貫通させている。重りとして使用されたものか。8はSE-142出土。スプーン先端部に似た形態をする。長さ14.5cmを残し、幅9.8cm、厚さ2.5cm、重さ360gを測る。全体に調整が雑である。一方を欠失し、細かい取っ手のようなものがつくと考えられる。

第50図9・10はサルと呼ばれるものである。9は包含層出土。長さ10.6cm、幅7.5cm、厚さ4cm、重さ310gを測る。底部を欠失する。10はSK-485出土。長さ9.9cm、幅7.1cm、厚さ3.2cm、重さ250gを測る。2点とも甕が裏の中央に吊された鍋を安定させるため、鍋の縁にかけられ、重りとして使用されたものである。

第50図11～15は砥石である。他に小形品など、種類が多く点数も30点を越える。ここでは特徴のある5点を図示した。11は包含層出土。長さ9.7cm、幅4.0cm、厚さ1.8cm、重さ110gを測る。石質は細粒凝灰岩である。12はSK-141出土。長さ8.4cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、重さ50gを測る。石質は細粒凝灰岩である。11・12の2点は断面がほぼ長方形になる板状の形を呈する。四側面とも使用する。13は包含層出土。長さ10.0cm、幅3.5cm、厚さ3.1cm、重さ120gを測る。縦断面がバチ状の四角柱を呈する。四側面とも使用されている。石質は細粒凝灰岩である。一端に孔を穿孔している。紐でぶら下げて使用していたものか。14はI溝出土。長さ8.6cm、幅4.7cm、厚さ4.5cm、重さ250gを測る。縦断面が長方形を呈する四角柱を呈する。四側面と先端部に刃を立てて研いだような使用痕を認める。石質は細粒凝灰岩である。11は包含層出土。長さ14.3cm、最大幅6.3cm、最小幅2.9cm、重さ590gを測る。縦断面がバチ状の四角柱四側面と先端部の一部に使用痕を認める。石質は砂岩である。

図示した5点以外の砥石のいずれも、非常に平滑な使用痕をしている。砥石の出土数とあわせて、かなりの頻度を以て使用されていたものと考えられる。

(赤沢)

木製品(第36図 25・26 第51図 第52図 1～8)

A) 漆器(第39図 25・26)

ほぼ全容が把握できるものが2点出土している。1点(25)は口径が11.2cm、器高が5.2cmで低い高台がつけられている。内面が朱漆、外面が黒漆で仕上げられており、外面の三方に二重円圈の中に楓の紅葉が朱漆で描かれている。他(26)は口径が12.7cm、器高が11cmで高台が高く、3cmである。前者と同様に内面が朱漆、外面が黒漆で仕上げられており、外面の三方の圈内に三つ巴が朱漆で描かれている。

B) 柄杓(第51図 1・2)が2点出土している。ともに轆轤で挽いた杓の片側の中ほどに穿孔し、柄を貫通させて見込みの縁に突き立てている。貫通した柄は杓の中の端に穿孔され、ピン状に削られた木片で固定されている。これらの柄杓は井戸の底で出土している。

C) 桶(第52図 1・2)が2点出土し、1点は手桶(1)で他は洗い桶(2)である。ともに竹製の箍が出土時点では遺存していたが、間もなく崩れた。手桶(1)は把手が両側の板を1枚ずつ長く延ばし、縦長の長方形の穴を開けて持ち手の棒を通してある。この横棒の位置は桶の上端と横棒の加担が同じ位置にある。箍は上端から4cm程の所に二条、底板と同じ位置に一条巡らされている。桶の口径は22.6cm、器高が16.6cmで容量が3773ccである。洗い桶(2)は手桶に比べて浅く口径が広い。箍の位置は同様であるが、底板が3枚の板を竹串で連結している。口径が26cm、器高が12.8cmで容量は3136ccである。

D) 独楽(第52図 3)は工具で丹念に削り出し、両端の尖った紡錘形をしている。片方の尖端に径2mmの穴を深さ7mmほど穿ち、木製の細い棒を差し込んでいる。棒は細いために片方の尖端を欠失している。独楽の長さは4.6cmで直径が4.1cmである。

他に轆轤で挽かれた蓋状のもの(第52図 4)があるが、用途については不明である。この直径が6.1cmで厚い天井に比較して直垂部が薄い。太い棒状のもの(第52図 5)は細い方の先端を欠いているが、もう一方の先端が頻りに突かれたような痕跡がある。杭か杵のような用途を持っていた可能性がある。板状の3点(第52図 6~8)のうち板材としか判別出来ないもの(6・7)と台形の板に柄をつけたもの(8)がある。この台形の長辺部が刃状ではなく、土掘り具とは思われない。除雪用具の木製のスコップ(当地ではパンコと呼ばれる)のようなものであろう。

金属製品(第53図 1~12)

金属製品としては農工具・家具・武具・祭祀具等がある。

鉄鎌(1)は、現在草刈りに使用される鎌に酷似している。棟は薄く、柄とはほぼ直角に装着される。装着部は、貴金具で固定している。

溝切り(2)は、鉄製品で形態的に用途を推定したもので正式の名称は不明である。柄との装着は、袋状にした装着部に柄を差し込んでいる。先端は焼き入れた状態が残り、錆がふいていない。使用時にはV字の削り痕を残すものである。

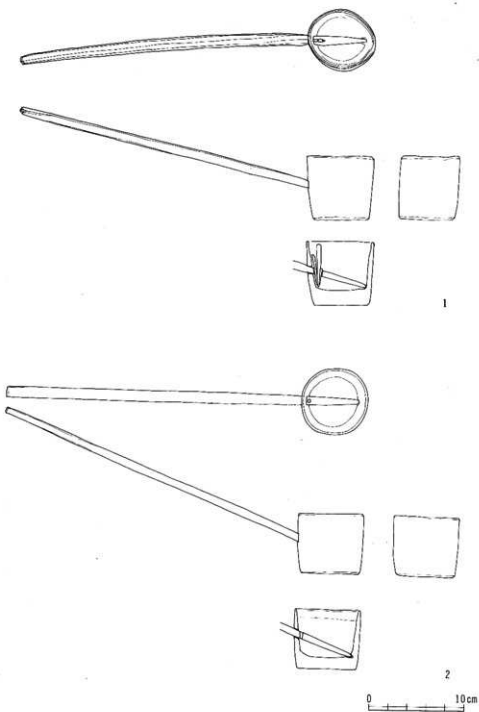
鉄の引手(3)は現在のたんすに使用されているものと同様である。釘(5・6)は、和釘とよばれる角釘である。他に鉄環を割りピン状の釘で挟んだもの(7)で、環は遊動式になっている。

小把の袋(8・9)は、2点ある。ともに銅で鉄の刃の部分は欠失している。一点は表側に5本の平行沈線の飾りがある。

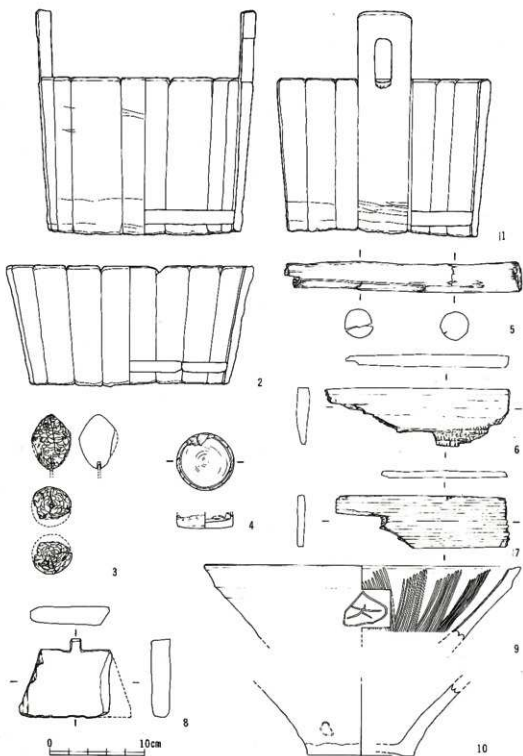
鉄の小札(10)と銅の幹(11)は甲斐に使用されたものである。

銅の六器は盃形で、本来仏具として使用されるものである。幹と六器は、同じ柱穴から出土しており、地鎮具にしたのであろう。

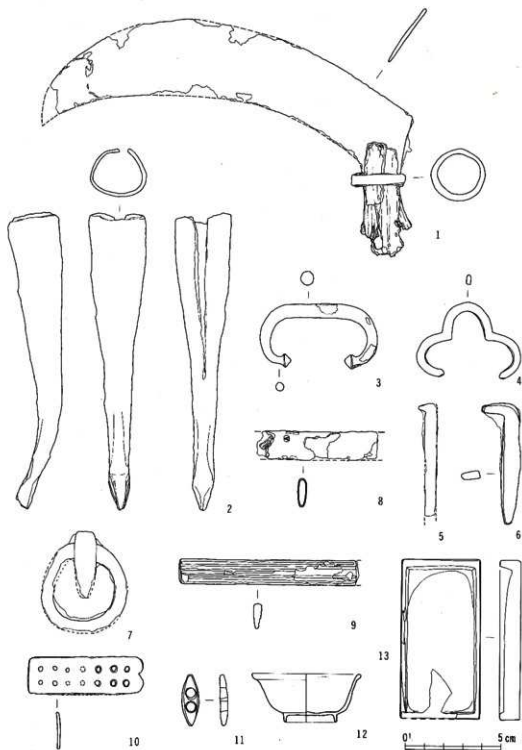
(山田)



第51図 下筋生田畑出遺跡出土木製柄杓実測図(1・2)



第52図 下筋生田畑田遺跡出土木製品（1～8）・越前焼（9・10）実測図



第53図 下筋生田畑田遺跡出土金属製品（1～12）・石硯（13）実測図

この他に土製品ではないが家屋の土壁が火災などの火を受けて焼土化した塊もある。これらは拳人の大きさに壊れているが、厚さ5cm程の板状を呈している。この中心にはコマイを結った壁らしくサスの痕跡を残し、表面は平面に仕上げられている。一時的な建物を推定するにしても簡単な小屋がけ程度のもではなかったであろう。

この他には36号井戸から出土した握り飯がある。これは多くの焼けた茅と木材の中にあり、完全に炭化している。そのために米粒の一粒が判別出来るほどに保存状態が良好である。

本遺跡出土の遺物は律令期と中世末期から江戸時代初期という2時期の集中した状態である。先の上筋生田遺跡江崎・八ヶ坪・塚町地区から出土した律令期の須恵器と同様の時期であり、9世紀を相前後する時期に相当するものであろう。

中世末期遺構の遺物は、生活臭の漂うものが多くあったともに茶器の大量の出土を見た。これらの中には近接する地である瀬戸美濃製品を凌駕する大量の九州地方の陶磁器があり、新たに開窯された唐津伊万里製品が日本海側に大量に出回っていたことを示しているのであろう。それまでの中国朝鮮製品の代替品としての需要の大きさを推定することができる。

遺跡が立地する条件として平安時代以降中世末までの空白があり、長期間におよぶ生活の場となれない何等かの理由があったのであろう。

特に中世末期から江戸時代初期にかけての遺跡の在り方は農村村落の通有の遺物組成とは思えない多くの茶器が一時的にしか使用の耐えない井戸から出土している。一般的の農村村落の発掘例は管見に触れる例は見当たらず、推定の域を出ないが、戦国末期の越前守護朝倉氏の滅亡と続く柴田勝家の滅亡という混乱期の中で茶の湯を楽しむような農村の風景を想像することは難しいであろう。

(山口)

参考文献

- 久保智康 蘇尾庵寺北陸の古代寺院—その源流と古瓦 資料編 北陸古瓦研究会編 桂書房1987 2 20
特別展「近世城館出土の陶磁」愛知県陶磁資料館 1984 10
古唐津屋—肥前陶器の歴史と美を探る— 佐賀県立博物館1968 10 7
大橋康二 北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 10
尻八館調査報告書 尻八館調査委員会 1981 3 26
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第81集 有田・小田部 第2集 福岡市教育委員会 1982
西谷 正 九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察 九州文化史研究所紀要第28号 1983 3 31
同氏より本遺跡出土のものが他に比較して焼きが弱いとの教示があり、国産品の可能性を指摘された。
特別史跡 朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ—朝倉館跡の調査— 福井県教育委員会 1979
川村俊彦 筋生田遺跡出土のおにぎりについて 福井考古学会会報 第3号
筋生田遺跡調査概報(Ⅰ) 福井県教育委員会 1981
筋生田遺跡第Ⅱ次調査概報(Ⅱ) 福井県教育委員会 1982

第4節 小結

本遺跡における遺構については第2節において詳述したが、それぞれの関係については不明な部分が多く家屋とそれに伴う井戸、それらを連絡する通路の関係は明らかではない。

今回の調査では旧河道として上筋生田遺跡第1次調査、上筋生田遺跡八ヶ坪・塚町地区、上筋生田遺跡江崎地区でも検出している旧河道が検出されており、旧河道内における遺物の時期、出土状況は同様である。これは旧河道に伴う自然堤防上に立地する筋生田遺跡遺跡群の一つであったことを示している。

今回の調査では、いままでとちがい江戸時代の遺構が多く検出された。

これらを現時点で一応の復元を試みるならば、下筋生田集落の東端にある白山神社の北に下筋生田集落とは水田をはさんで隣接した1haほどの微高地があった。微高地には村の鎮守の白山神社から北方にのびる幅1mほどの道が水田の中をのび、そこには砂利が敷きつめられている。

道は微高地に入り左右に分かれる。道のつきあたりと、西側には建物がたち、東へのびる道の西側にも建物がたっていた。左へ分かれた道は北にむかってまがっている。建物の戸数は不明であるが、土壁や萱葺の家もあり数度の建替えがおこなわれていたと思われる。江戸時代の遺構の存続期間については詳細な遺物の検討の後に考えられるべきものであろう。

今回の調査地区における大きな疑問は井戸にある。構造については前述した如く、素掘りという極めて単純なものであった。54基の井戸すべてがそうであり、その数の多さには調査面積に対してあまりにも多い。このことは井戸が短日にて崩落し、使用不能となったために新たな井戸を掘ることになったためと思われる。しかし、毎回崩落をくり返す井戸を掘り続けることがあったのであろうか。

近年明らかになってきた福井市城戸内町にある一城谷朝倉氏遺跡内の町屋群において小さな町屋が連続する地区では、一戸に対して一基付けことが基本となっている。ここでは井戸を掘りなおすことはなく、井戸を構造的に石積、井戸枠等で補強している。又、福井市曾方布町曾方布遺跡では井戸の底付近を曲物の井戸枠で補強している。この例からみるならば、井戸を恒常的に掘り続ける理由は見あたらず、長期間に同一の井戸を使用しようとする意識が感じられない。

しかし、一時的な水利用のための井戸と、長期間使用する井戸との差異はこのような構造的な差異だけで把握することの確信はないが、現状では本遺跡で検出した井戸が短期間しか使用されなかったことは確かなことである。

これらの疑問は遺物の検討とともに解決されることであるが、遺物からの検討では長期間の継続的な生活の様子は伺うことは出来ない事と、遺物組成が一般的農村村落のものではないと思われる。

ここで敢えて推定するならば茶の湯等の通常の農村の生活とはかけ離れた行事が一時的に開催され、その都度仮の茶室のようなものと井戸を掘っていたのかもしれない。短期間に立て替える頻繁な建物、異常に多い簡便な井戸はその為であろう。

(山口)

第V章 ^{しもあそうだふでつけ} 下蒔生田筆付遺跡

第1節 調査経過

1 調査の概要

福井市下蒔生田字筆付と福井市大町字畠田にある。

福井市街地の南にある下蒔生田町は上蒔生田町の西に隣接し、下蒔生田畑田遺跡などが集落を覆っていると言っても過言ではないであろう。

今回調査を実施した下蒔生田筆付遺跡は、下蒔生田町の集落の西端にあり、西北にある大町地係の水田にまで及んでいる。

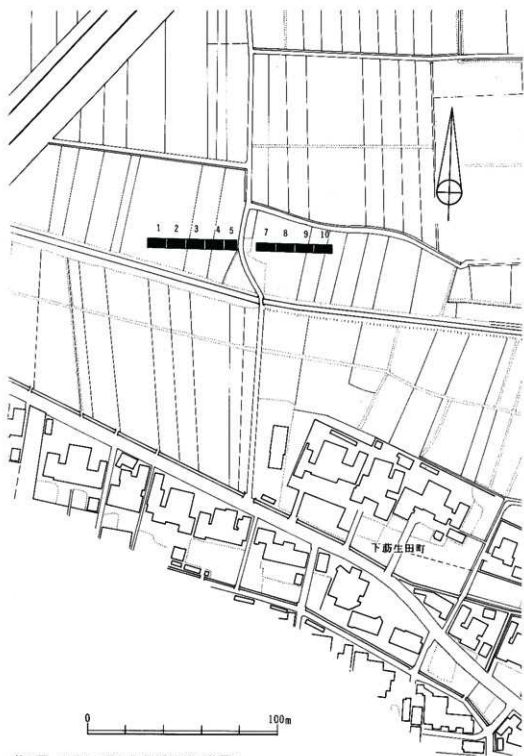
調査地は、東から西に流れる大町川の北に平行して新たに大町排水路となる予定地で、ほぼ長さ100mある。

調査区の設定は、東西に長い調査地を西端から東へ10m毎に1～10区とした。幅は、ほぼ4mである。6区には、農道が一部かかっており、調査中も共用されていたために発掘は不可能であった。終了後の調査区は、字筆付で長さ41.5m、幅5.5m、字畠田で長さ47m、幅6.0mとなり、 510.25m^2 を発掘調査した。

2 調査日誌抄

1981年(昭和56)年

- 9月10日 本口より筆付地区での現場調査を開始した。
- 9月11日 大町畠田にある1～5区の精査を開始した。
- 9月14日 1～5区の遺構を掘り下げ作業をほぼ終了した。5区の東端から、大きな溝を検出した。
- 9月16日 1～5区上層の遺構の写真撮影をした。
- 9月18日 1～5区上層の遺構を実測し、平面図の作成をした。
- 9月19日 1～5区下層の掘り下げを開始した。
- 10月 1日 1～5区下層の遺構検出をほぼ完了した。
- 10月 2日 1～5区下層の遺構の写真撮影と実測をし、平面図を作成した。
- 10月 6日 1～5区の壁面を清掃し、断面図の作成をした。
- 10月 7日 6～10区の精査を開始した。
- 10月10日 7区で大きな弧状の溝を確認した。
- 10月15日 7区で確認した弧状の溝を境に8・9区では遺構、遺物は確認されなかった。
- 10月17日 6～10区の遺構を清掃し、写真撮影をした。
- 10月19日 6～10区の遺構を実測し、平面図と断面図を作成した。
- 10月20日 下蒔生田筆付遺跡での調査をすべて終了し、発掘器材を下蒔生田高畔遺跡に移動した。



第54図 下筋生田筆付遺跡発掘調査区位置図

第2節 遺構

1 遺跡概説

下筋生田筆付遺跡は、福井市下筋生田町字筆付と一部福井市大町字畠田に広がっており、1～5区の大町畠田地籍では、上下2層に遺構の検出面をもっていた。

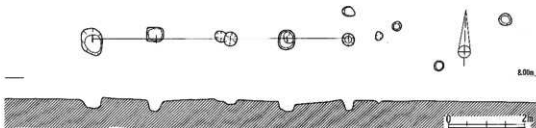
上層では、11個の柱穴状の掘り込みと、井戸1基、土壇1基、溝1条が検出され、下層からは柱穴7個、土壇3基、溝1条が検出された。6～9区では、検出面が一面で1～5区の下層に対応する面であった。この区間で検出した遺構は土壇1基、溝2条であった。

1～5区までの上層の遺構は、表土(耕土)と、その直下の灰色土を除去した後に検出した薄い堆積の黄褐色土の上面で検出し、下層の遺構は、上層の遺構検出面の下にあった暗褐色土を除去して検出した。6～10区では、上層に対応する面はなく、暗褐色土の除去後に検出した。

2 遺構各説

SA-001(第55図)

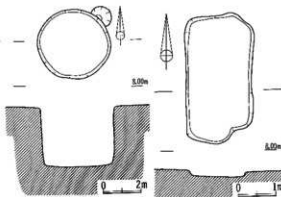
上層の1区から2区にかけて検出した直線上に並ぶ柱穴状の掘り込み6個で、やや東を北に振っているがほぼ東西方向に延びていた。西から3個目の掘り込みは、2個が一部重複しており、柱間は、4間であった。柱間寸法は、5.6尺等間で全長6.72mであった。掘り込みの形状は、方形、円形、不定形とまちまちではあるが、径0.5m内外で、深さが0.2～0.3mほどであった。他に5個の柱穴状の掘り込みがSA-001の東端にあったが規則性もなく、性格は不明である。



第55図 SA-001実測図

SE-002(第56図)

上層の3区で検出した直径1mの掘り込みで、ほとんど垂直に0.8mの深さまで掘込まれている。底面はシルト記りの砂層に達しており、曲物などの井戸側の施設が無いものの井戸として充分に可能であり、調査時においても豊富な水量を保有していた。



SK-003(第57図)

上層の5区と6区の境界上で検出した土壇で、9m、長さ1.7m、深さ0.15mの南北に長

第56図 SE-002実測図 第57図 SK-003実測図

くあった。肩は垂直に近く、墳底は平坦であった。底面に密着して完全に近い須恵器の杯が出土し、他にも数点の土師器・須恵器が出土した。

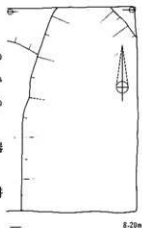
SD-004(第58図)

上層の5区で検出した大きく深い溝状遺構で、東側が共用中の農道の下に在り、確認できなかった。西の肩口の方向は、ほぼ南北に延びていたが、調査区内の北端で東の肩口の一部が検出され溝の幅が極端に狭められていることが確認できた。調査区内では長さ5.42mが検出できた。

須恵器が僅かに出土しているが、時代的には不明な点が多く、須恵器より、大きく下の時期のものと思われる。

上層からは全面にわたり、土師器、須恵器の細片が出土しており、耕作等で相当の擾乱があったと思われる。

下層から検出した遺構は、1区と2区にわたる不定形の落込み(SK-005)と、2区東側の落込み(SK-006)、3区から5区にのびる溝状遺構(SD-007)、4区で溝状遺構と重複する土塼(SK-008)、5区の柱穴列(SA-009)である。これらの遺構の性格は、不明なものが多かった。

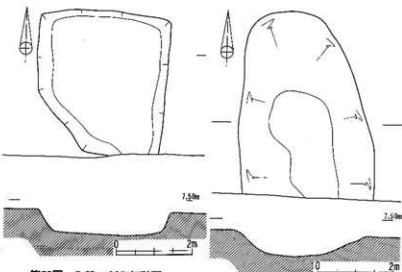


第58図 SD-004実測図

SK-005(第59図)

下層の1・2区にまたがって検出された不定形の土塼である。平面形は、1辺3.5mの方形に近いが、南西の隅が欠け、五角形で、南辺が、調査区外にあって確認できなかった。

深さは0.7mで、壁が、垂直に近く立ち上がり、平坦な墳底をしていた。



第59図 SK-005実測図

SK-006(第60図)

下層の2区の東よりで検出した南北に長い土塼である。南半は、調査区外にあって、確認は不可能であったが、検出した部分では、幅1.8m、深さ0.32mで、長さは2.5m以上であった。墳底は、凹凸があり、壁も緩く傾斜していた。

以上、2基の落込みは性格が不明で遺物もほとんど出土しておらず、わずかな遺物から推定はできないが、現代に近い遺物の出土はなく、後世の擾乱等を想定することは、無理であろう。

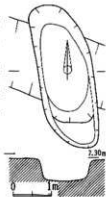
第60図 SK-006実測図

SD-007(第61図)

下層の2区から5区までで検出した溝状遺構である。

2区の中ほどの北辺から4・5区の境の南辺まで延びており、東をやや南に振った東西方向の溝である。

調査区内では長さ22.47mが検出できた。上端の幅は、最大1.27m・最小0.67mで平均1.0mであった。溝底は、浅皿状でほとんど深さを計測しえない部分もあり、0.10~0.29mで西に向かって0.10m下降している。溝底には、金属分の集積が著しく、非常に固くなっている。これは、溝が埋まった後に浸透しにくい溝底上に金属分を多量に含む地下水が流れたためにおこったと思われる。



SK-008(第61図)

下層の4区中央で検出した土壌である。

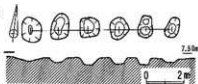
土壌は、南北に長さ1.8m、幅0.7mで、巾を同じくして長さ1.6mの下段があった。上端からの深さは下段まで0.3m、上段では0.1mであった。

第61図 SK-008
実測図

SA-009(第62図)

下層の4区の北半で検出した柱穴状の掘り込みの列で直線的に6個あった。

掘り方は、径0.45mを前後する不正円形で深さが深いものでも0.2mまではない。これらは、2.5尺毎に等間隔にあり、同一の意図のもとに掘り込まれたものと思われる。



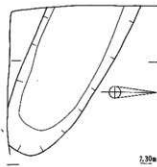
第62図 SA-009実測図

SK-010(第63図)

6区の東北隅で検出した土壌である。

土壌は、西側の一部が共用中の農道の下にあったために、長さは不明であったが、幅は1.1m、長さが現状で2m以上、深さが1mを超えていた。

土壌の長軸は、西北西から東北東に方向にむいており、漆黒色の粘性の強い土が充満していた。墳底は、深く砂層にまで達しており、湧水が激しかった。



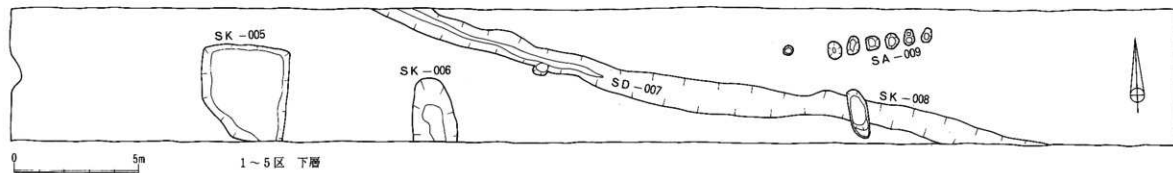
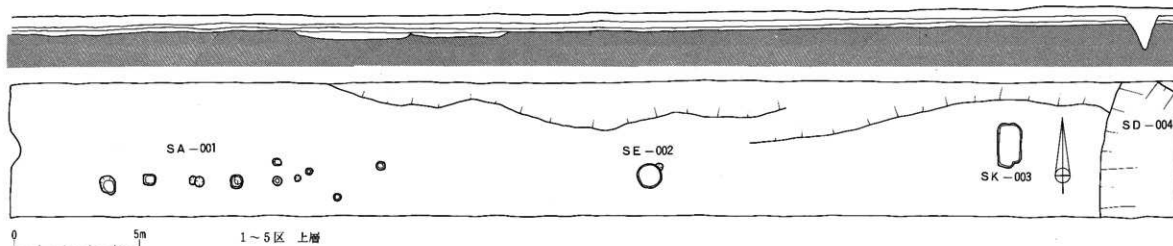
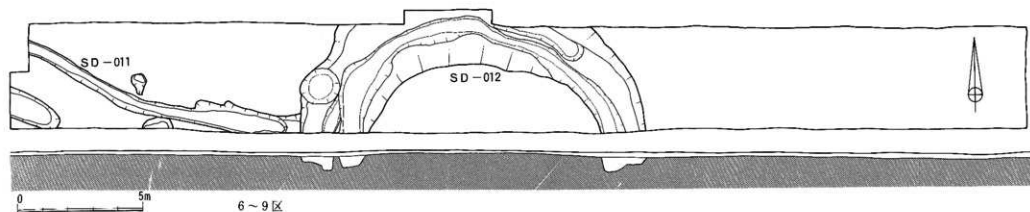
SD-011(第64図)

6区の東端から7区にかけて検出した溝状遺構である。

6区の東端から、東南東に1.0mほど延びて緩やかに東に曲がり、7区から9区にかけて検出した弧状の溝状遺構(SD-012)に東端が重複している。調査区内では、長さ10.92mが検出できた。

上端の幅は、最大1.07m・最小0.45mで平均0.5mほどであった。

第63図 SK-010実測図



深さは、0.08～0.27

mほどで溝底の傾斜に
方向性がなく、水の流
れた痕跡は無かった。

SD-012 (第65図)

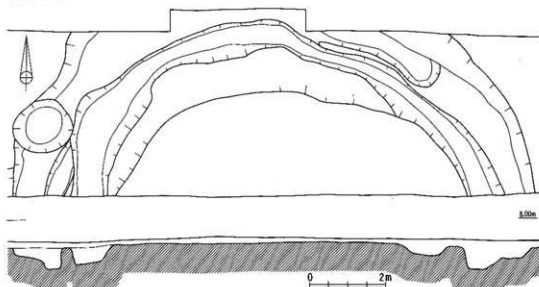
7区から9区にかけ
て検出した弧状の溝状
遺構である。半円形の
溝は二重になっており、



第64図 SD-011実測図

外側の溝の幅がひろく浅く、内側の溝の幅が細く深くしている。7区にかかる部分では、外側と内側の溝がはなれ、その間に細く深い別の溝が1条ある。8区には検出した半円形の溝の大半がある。内側の溝は、調査区内では、長さ14.30mが検出できた。溝の内側が垂直に近い肩をもち、深いところでは0.92m・浅いところでは0.56mであった。幅は、最大1.52m・最小0.45mで1.0mを前後しているが底面では細く、最大0.92m・最小0.20mを前後していた。外側の溝は、調査区内では内側の肩口で長さ16.60mが検出できた。肩がなだらかで深さが0.28～0.46mで、重複した幅は、最大2.57m・最小1.80mときわめて不安定である。9区では内側、外側の深さが近づきつつあるがなお内側の溝が深い。この2条の溝をうめていた埋没土は、内側の溝に漆黒色の粘性の強い土で、外側には、それよりもやや黒色の淡い粘性の強い土が主体になっていた。両方の溝とも、底面では砂層に達しており、湧水がはげしい。これらの埋没土からは水流の痕跡は確認できなかった。

(山口)



第65図 SD-012実測図